

令和2年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ ムーブメント全国展開事業

実 践 事 例 集

令和2年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ ムーブメント全国展開事業

実 践 事 例 集

目 次

1. 実践事例集について	1
--------------------	---

2. 実践事例

スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び

栃木県立小山城南高等学校（栃木県）	3
柏市立田中中学校（千葉県）	5
長野市立鍋屋田小学校（長野県）	7
沼津市立第二中学校（静岡県）	9
岩美町立岩美西小学校（鳥取県）	11
益田市立美都中学校（島根県）	13
津山市立北小学校（岡山県）	15
飯塚市立二瀬中学校（福岡県）	17
岡山市立上南中学校（岡山市）	19
北九州市立城南中学校（北九州市）	21

マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

岩泉町立小川中学校（岩手県）	25
茨城県立常陸大宮高等学校（茨城県）	27
昭和学院秀英中学校（千葉県）	29

スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築

鹿嶋市立鹿島小学校（茨城県）	31
群馬県立安中総合学園高等学校（群馬県）	35
鈴鹿市立一ノ宮小学校（三重県）	39
京都府立東稜高等学校（京都府）	41
岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）	45
和気町立佐伯中学校（岡山県）	49
高松市立屋島東小学校（香川県）	53
熊本市立託麻東小学校（熊本県）	55
いちき串木野市立市来小学校（鹿児島県）	57
千葉市立若松小学校（千葉市）	59
浜松市立都田南小学校（浜松市）	61
京都市立七条中学校（京都市）	63

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

滝川市立江部乙小学校（北海道）	67
浦安市立見明川小学校（千葉県）	69
秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学・高等学校（千葉県）	71
千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）	75
徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）	77
静岡市立中藁科小学校（静岡市）	81

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

七ヶ浜町立向洋中学校（宮城県）	83
猪苗代町立翁島小学校（福島県）	87
埼玉県立羽生第一高等学校（埼玉県）	89
千葉県立東金特別支援学校（千葉県）	91
中能登町立鹿島小学校（石川県）	95
羽島市立竹鼻小学校（岐阜県）	97
春日井市立知多中学校（愛知県）	99
滋賀県立愛知高等養護学校（滋賀県）	103
福山市立加茂中学校（広島県）	105
山陽小野田市立有帆小学校（山口県）	107
大洲市立大洲幼稚園（愛媛県）	109
高知県立高知国際中学校（高知県）	111
札幌市立中の島中学校（札幌市）	113
横浜市立南吉田小学校（横浜市）	115

3. 参考資料（筑波大学附属学校群）

筑波大学附属聴覚特別支援学校	119
筑波大学附属桐が丘特別支援学校	123

実践事例協力校一覧	125
-----------	-----

実践事例集について

本事例集は、令和2年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において、各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な事例を集約したものである。後述する5つのテーマ別に、全国の推進校から計45事例を抽出し、あわせて巻末には筑波大学附属学校群における2事例を掲載した。令和3年度以降の有意義な事業展開に向けた参考資料として、また2021年の東京大会を契機とした日本のオリンピック・パラリンピック教育に関する記録として活用されたい。

1. 本事業の目的

東京2020大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成27年11月27日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。また、文部科学省およびスポーツ庁で組織された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（平成27年2月～平成28年7月）」の最終報告では、全国的なオリンピック・パラリンピック教育の普及の意義として、以下の内容が提示されている。

(1) スポーツの価値

- ・スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし、人々が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。
- ・スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。

(2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義

- ・オリパラ教育の推進には、オリンピックの3つの価値（卓越 Excellence、友情 Friendship、敬意／尊重 Respect）とパラリンピックの4つの価値（勇気 Courage、決意 Determination、平等 Equality、インスピレーション Inspiration）が必要。
- ・オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて活躍できる人材を育成するもの。

(3) オリンピック・パラリンピック教育の具体的内容

- ・オリンピック・パラリンピックそのものについての学び（大会に関する知識、選手の体験・エピソード等）
- ・オリンピック・パラリンピックを通じた学び（スポーツの価値、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等）

本事業は、主に上記の内容および平成27年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」の成果をふまえ、全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（各自治体教育委員会等）が連携し、学校や地域

一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

2. 令和2年度の事業概要

令和2年度における全国中核拠点と参加地域拠点を以下に示す。各地域拠点では、担当大学の支援を受けながら、東京2020大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践を展開した。

筑波大学：宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市

日本体育大学：北海道、栃木県、千葉県、新潟県、石川県、山梨県、兵庫県、岡山県、高知県、大分県、千葉市、新潟市、大阪市、神戸市、岡山市

早稲田大学：岩手県、埼玉県、岐阜県、静岡県、三重県、滋賀県、鳥取県、広島県、香川県、熊本県、鹿児島県、札幌市、横浜市、静岡市、浜松市

また各推進校では、以下の5つのテーマに基づきオリンピック・パラリンピック教育が実践された。なお、同テーマはスポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京2020組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）から構成される「スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」において議論され、決定されたものである。

（本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」のテーマ）

オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本事例集では、各地域拠点の推進校における「実践報告書」の文面を抜粋し、冊子体裁の都合上、一部編集・用語の統一を行っております。なお複製、転載等の際には、スポーツ庁による承認手続きが必要となります。

実践事例 1 栃木県立小山城南高等学校（栃木県）

1 実践のテーマ

教育活動全体を通した各教科における取組

2 対象者

全校生徒 599 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：国語、地歴・公民、理科、保健体育、芸術、外国語、家庭科

その他：総合的な探求の時間

4 目標（ねらい）

学校の教育活動全体を通してオリンピック・パラリンピック教育を推進し、オリンピック及びスポーツの価値への理解を深め、フェアプレイ意識の涵養、スポーツの背景にある科学的論理、言語や文化、価値観の多様性を理解することにより、短期的には主体的に考え積極的に行動できる生徒を、将来的にはグローバルな視野を持って社会に貢献できる人材を育成する。

5 取組内容

【国語科】

「現代文 B」 評論：消費されるスポーツ

「国語表現」 福祉とオリパラについて考える

【地歴・公民科】

「世界史 B」 第二次世界大戦とオリンピック

「世界文化史」 古代オリンピックについて

「国際事情」 コロナとオリンピックをテーマに意見発表会

【理科】

「科学と人間生活」 電波とオリンピック

「身近な科学」 暦、天気、スポーツと力学・生理学

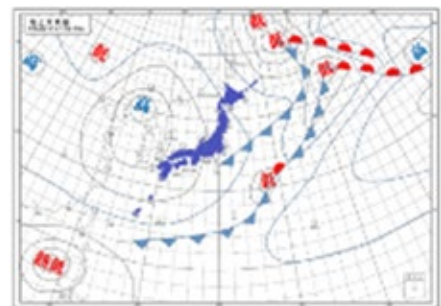
「生物」 学習と記憶

「生物基礎」 筋収縮

【保健体育科】

「スポーツ概論」 オリンピックの歴史

「スポーツⅠ」「体育」 オリンピックの記録等を紹介



1964 年 10 月 10 日の天気

【芸術科】

「応用美術 B」 オリパラ競技をデザイン

【外国語（英語）科】

「異文化理解」 オリンピック名言に係わる英作文

「フランス語」 クーベルタンの名言

【家庭科】

「調理」「製菓」「栄養」世界の料理・菓子実習、スポーツ栄養

「服飾手芸」 フランス刺繍、クリスマスリース製作

【総合的な探求の時間：第2学年】

「オリパラ～開催賛成か反対かを検証～」

東京2020大会誘致について班別研究を行い、スポーツ振興、経済効果、環境問題など、多様な視点からオリンピック・パラリンピックを見つめ直した。研究結果をまとめ、全ての班、生徒がクラスで発表した。学校行事のキャリア教育発表会でも展示を行い、オリパラの意義と課題を深く考える機会となった。



6 成果

- 授業を通じて、スポーツと科学、スポーツと社会の関連性などについて理解することができた。
- 授業を通じて、広く世界に目を向け、その民族や文化の多様性について考える契機となった。

7 実践において工夫した点（特色）

オリパラ推進事業を通して、学年単位で教職員、生徒が協働して活動し、生徒同士の交流の活性化につなげた。

8 課題等

- オリンピック・パラリンピックについて、生徒がより深く考え、積極的に行動できるよう、継続して取り組む必要がある。
- コロナ禍のため、総合的な探求の時間の発表会も全体発表ができなかった。全体集会が実施できるように更なるコロナ対策が必要である。
- 事業開始が遅れ、教員の共通理解が不十分なままに取り組まざるを得なかった。今後は、事前の情報共有を図り、より計画的に、かつ協働で取り組む必要がある。

実践事例 2 柏市立田中中学校（千葉県）

1 実践のテーマ

オリンピック、パラリンピックの意義の学習

2 対象者

オリパラ道徳 全校生徒 524 名
オリパラ英語 第2学年 164 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：英語

その他：道徳

4 目標（ねらい）

共生社会の形成者にふさわしい、障がいのある人や高齢者等を含めた他者を理解するとともに、自国及び地域の伝統文化について理解を深め、他国の文化、言語についても積極的に学び、世界の舞台で活躍する生徒を育成する。

5 取組内容

【オリパラ道徳】

過去の東京オリンピックやオリパラのイメージを膨らませ、「オリパラの目的がなぜ平和な世界の建設なのか。」「私たちができる国際貢献はどんなことだろうか。」について考えた。



【オリパラ英語】

オリンピック・パラリンピックの意義を ALT によるオールイングリッシュの授業で学び、生徒オリジナルのオリンピック・パラリンピックシンボルデザインを考えた。



6 成果

【オリパラ道徳】

生徒の意見より、「お互いを尊重し合うこと、言葉や文化の違いを受け入れたい。」「世界貢献も大事だが、まずは、クラスなど身近なところで貢献したい。」など、オリンピック・パラリンピックの意義について十分深めることができた。今後の展開で、仲間や自分の考えをベースにさらに深められることが期待できる。

【オリパラ英語】

生徒の考えたデザインの多くは、五大大陸をあらわす五つの輪と色を意識しつつも、「Excellence・Respect（卓越と敬意）」などオリンピック・パラリンピックのもつ moral values 道徳的価値観をもとに作成したものが多く、人の心のつながりを感じ、世界の平和を願う心が育まれた。

7 実践において工夫した点（特色）

- はじめに「オリンピック・パラリンピックの意義」について十分に考えた上で、それぞれの取組内容を展開し、体験しながら前もって考えたオリンピック・パラリンピックの意義について深められるようにした。
- これまでの学びや経験を生かして授業の中で展開し、家庭や地域でも身近なもの・自分のこととしてオリンピック・パラリンピックを感じられるようにした。

8 課題等

- それぞれの取組につながりをもたせて、より効果的に展開すること。
- オリンピック・パラリンピックの意義について、世界とのつながりを自分自身とのつながりとして捉えられるように工夫すること。
- スポーツを通じた共生社会の構築について考えること。

実践事例 3 長野市立鍋屋田小学校（長野県）

1 実践のテーマ

1998 年長野冬季大会についての学習およびダンスの実践

2 対象者

第 5 学年 32 名、第 6 学年 30 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

行事名：運動会

その他：総合的な学習の時間、児童集会

【地域における活動】

イベント名：セントラルスクエア オープニングセレモニー

第三住民自治協議会主催 まちなか子どもフェスタ

4 目標（ねらい）

- 長野冬季オリンピック当時の地域の方々の願いや思いを知る。
- 児童同士のつながりや地域のつながりをいっそう深める。
- 多様なスポーツへの関心を深める。
- 音楽に合わせて簡単なステップや動きで踊り、友と共に楽しむ。

5 取組内容

- (1) 1998 年長野冬季大会について知り、東京 2020 大会のためにどんな協力ができるかを考えた。1998 年長野冬季大会当時の記録映像を見て、当時の様子や雰囲気、地域の方々の思いなどを知り、自分たちが東京 2020 大会にどんなかたちで協力できるかを考えた。
- (2) 東京 2020 大会テーマソング「パプリカ」と 1998 年長野冬季大会テーマソング「WA になっておどろう」もダンスに取り組んだ。
 - ①全校で「パプリカ」を踊ろう。
 - 臨時休業中、児童会長が「家からつながろうなべっこ児童集会」と題して、全校に「会えなくても、同じ時間にみんなで『パプリカ』を踊ってつながろう」と提案。テレビの「パプリカ」の放送に合わせて大勢の子どもたちが家で踊った。その様子をご家庭で写真に撮って学校へ届けていただき、児童昇降口に掲示した。
 - 分散登校中や学校再開後にも各学級で友と踊り楽しんだ。
 - 運動会で 5・6 年生がダンスを披露。最後には、全校児童と職員全員が踊り、みんなでつながった思い出深い一時となった。



- ② 5・6年生で「WA になっておどろう」を踊ろう。
- 1998 年長野冬季大会の際に「WA になっておどろう」の振付を指導された塚田まゆり先生を講師にお招きしてご指導いただいた。
- セントラルスクエアオープニングセレモニーに参加。1998 年長野冬季大会で表彰式会場であったセントラルスクエア（学区内）が、今年、まちなかの公園としてリニューアルした。そのオープニングセレモニーに参加し「WA になっておどろう」と「パプリカ」のダンスを披露した。地域の方々も、当時の様子を出し懐かしく思いながら見て楽しんでくださった。
- 地域のイベント「まちなか子どもフェスタ」がセントラルスクエアを会場にして開かれた。そこに参加して2つのダンスを披露した。



6 成果

- 臨時休業中の「パプリカ」のダンスをみんなで踊ろうという児童会長からの提案は、友と会えない寂しい状況の中で、みんなの心をつなぎあたたかな気持ちにさせてくれた。運動会でも全校で踊り、みんなの心がつながるうれしい種目となった。
- 1998 年長野冬季大会表彰式会場のリニューアルのセレモニー等地域のイベントにオリンピックテーマ曲のダンスを披露したことは、子どもたちにとって地域の歴史やオリンピックについての理解を深める機会となった。また、オリンピックに縁のある地域を盛り上げることに繋がった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 本校のすぐ近くに 1998 年長野冬季大会の表彰式会場だったセントラルスクエアが、今年度、野外ステージ付きの公園としてオープンした。そのステージで、オリンピックテーマソングのダンスを披露することができた。
- 1998 年長野冬季大会開会式のダンス指導者から直接ご指導いただくことができた。

8 課題等

特になし。

実践事例 4 沼津市立第二中学校（静岡県）

1 実践のテーマ

教員の連携による多角的なオリンピック・パラリンピックについての学習

2 対象者

全校生徒 118 名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関して学習を深めること。また、その学習を通してよりスポーツに興味関心を持ち、生涯にわたって運動に親しむ資質を育てること。そして、2020 東京オリンピック・パラリンピックをより身近なこととして捉えられるようになること。

5 取組内容

全 10 回でオリパラ教育を実施した。また、内容の違いによって前半部と後半部の 2 部制で展開した。

「前半部分」

6 人の先生方で 1 人 1 テーマ（計 6 テーマ）を設定し、全 6 学級で先生方がローテーションをしながら授業を行った。

1. オリンピックと国際理解、国際親善
2. オリンピック聖火について
3. オリンピックと環境
4. オリンピックと日本経済の発展・レガシー
5. オリンピックにおける歴史的に著名な選手
6. オリンピックのエンブレムについて

「後半部分」

内容

- 体育館でパラリンピックの魅力について、「二中 みんなのスポーツ大会」をどのように取り組むかの概要説明の講習会。
- 各学級にて運営する種目に関してルール、実施方法などを検討。
- 「みんなのスポーツ大会」の実施。（ティーボール・車椅子スラローム・シッティングバレー・ブラインドリレー・ゴールボール・ボッチャ）



6 成果

- 先生方の得意分野を生かしてテーマ学習を行ったことでオリンピック・パラリンピックに多角的に捉えることができ、大会との関わり方が色々あることを学習できた。
- 実際に各種パラ競技を体験することで、生徒たちがパラ種目そのものに健常者と障がい者の垣根を外す可能性があることを実感できた。
- スポーツが苦手と思っている生徒にとっても活躍できる場面があり、スポーツを楽しむことができた。
- 自分たちの競技の体験とパラアスリートが障害を持ちながらも競技レベルを向上させている事実を比較し、パラアスリートたちの心の強さを感じることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

小規模な学校ということもあり、学校全体を巻き込んで全校での取り組みとした。それによってすべての先生方が興味を持って楽しみながらオリパラ教育を実施してくれた。

8 課題等

- 前半部については、どの学校規模でも実施出来る。課題は、各テーマを担当する先生方がローテーションできる時間割になっているか、先生方のテーマがそれぞれ違うものになっているかを調整する必要があること。
- 後半部については、学校規模や活動単位、スペースの確保を配慮しつつ、種目の検討をする必要がある。パラ種目のみで開催をしようとするすると種目数に限界があるかも知れない。

実践事例 5 岩美町立岩美西小学校（鳥取県）

1 実践のテーマ

学校全体での「道徳」と関連付けたオリ・パラ教育実践

2 対象者

全校児童 146 名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間、道徳、学級活動、委員会活動

4 目標（ねらい）

○昨年度に続いてパラアスリートとの交流を通して、パラリンピックやパラアスリートへの理解を深める。

○パラアスリートのホスト校として全校で応援する機運を高める。

5 取組内容

「道徳の時間でオリンピックやパラリンピックを扱った題材を扱う」

内容

○1年生「みらいにむかって（錦織圭）」

○2年生「美字は、みう。（平野美宇）」

○3年生「ソフトボールで金メダルを（上野由岐子）」

○4年生「レスリングの女王（吉田沙保里）」

○5年生「世界に羽ばたく「航平ノート」（内村航平）」

○6年生「こだわりのイナバウアー（羽生結弦、荒川静香）」

「図書委員による活動」

○オリンピック・パラリンピック情報の掲示。



6 成果

- オリンピック・パラリンピックに対して興味を持ち、アスリートの思いや行動等を自分事として捉えることができる児童が増えた。
- パラリンピックについて調べるにあたり、調べる項目を児童で分担し、協力した結果、パラリンピックの歴史や選手の思いや行動等、様々なことを知ることができた

7 実践において工夫した点（特色）

2年間を見通しての実践を行った。（オリンピック・パラリンピックが中止となり、また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、中止した。）

8 課題等

選手との交流を通してオリンピック・パラリンピックについて学ぶことは、教育的効果が大きいと、交流ができない場合の教育的効果について。

実践事例 6 益田市立美都中学校（島根県）

1 実践のテーマ

オリパラ調べ学習

2 対象者

第2学年 7名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：調べ学習「情報発信・情報収集」

4 目標（ねらい）

1年を通して継続して、オリンピック・パラリンピックに関する調べ学習に取り組むことで、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を高め、東京大会への機運を盛り上げる。

5 取組内容

夏休みの課題

「応援するぞ パラリンピック！イチおし競技をみんなにアピール」

夏季22競技、冬季6競技から自分の「イチおし」競技を決め、調べ学習する。夏休みの課題としてレポートを作成し、文化祭等で展示発表した。



冬休みの課題

①オリンピック・パラリンピックに関する最新情報を集める

○新聞、テレビ、インターネットなどから自分の興味ある最新情報を要約し、感想を付けて紹介ワークシートに取り組んだ。冬休み明け、教職員全員で分担して紹介された情報にコメントを付けて、掲示した。

○紹介文に付けたタイトルには、「心を一つに頑張ろう」「どうなる!? 東京大会」「コロナ禍の開閉会式」「リサイクルの表彰台」「コロナ禍…選手たちの思い」な



どがあった。

②今年度取り組んだことを「誰か」に発信する

○これまでの取組をまとめたファイルを家に持ち帰り、それを使ってこれまでの活動や学んだことを誰か（保護者、親戚、近所の人）に伝える活動をした。伝えた相手からもらったコメントは冬休み明けにカードに清書して掲示板に貼った。

○コメントには、「パラリンピックのことを娘から教えてもらい、これを機に注目したいと思った。」「一つの競技を調べることからパラリンピックへの理解を深めていってよいと思う。地域の人たちにももっと発信してほしい。」「推進校としていろいろなことを調べ、さまざまな活動や取組を通して深い関心をもてたのでは。」「何よりパラリンピアンとの交流やめったにない体験で、子どもたちの心に響いたと思う。」「ますます東京大会が楽しみになった。」などがあった。



6 成果

- 一人一競技を担当することで、これまでに購入したオリパラ関連の図書資料を有効活用し、ルールや歴史、注目選手などしっかり調べることができた。
- 学びや気づきを他者に発信することを通して、自分の考えが深まったり広がったりした。

7 実践において工夫した点（特色）

- これまでの取組を振り返ることができるよう、オリパラ教育用のファイルを用意し、活動の感想やワークシート、集めたパンフレットなど、オリパラに関連するものは綴じておいた。
- コロナの影響で、保護者や地域の方々を集める場が少なくなったので、無理なくできる情報収集・情報発信の仕方を模索した。

8 課題等

「イチおし」の競技を調べる過程で、その競技への関心は高まったが、その後、その興味関心を継続させることが必要である。

実践事例 7 津山市立北小学校（岡山県）

1 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピック調べ学習

2 対象者

第4学年 38名、第5学年 33名、第6学年 40名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：社会

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

東京オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高め、歴史や競技内容、参加国の文化などを学ぶ。

5 取組内容

【第4学年：オリパラ新聞を作ろう】

オリンピック・パラリンピックの新聞を作ることを伝え、記事にする内容をインターネットや本で調べた。調べた内容を記事にまとめて新聞を完成させた。学級だけでなく、学年の友だちと新聞を読み合った。

【第5学年：オリンピック・パラリンピックに参加する国を知ろう】

社会科の「日本の国土」の学習を受け、総合的な学習の時間で、世界の国について調べた。児童が東京オリンピック・パラリンピックに参加する国を決め、インターネットを使って調べ学習をした。完成した新聞を友だちと読み合い、参加国ならではの文化や伝統のある競技を学ぶことができた。

【第6学年】

①「東京オリパラ2020 ～伝えよう オリパラのすべて～」

6年生40名が9つのグループに分かれ、第1～5学年にオリパラのことを伝える。パワーポイントソフトを使ったり、模造紙にまとめたりして、発表した。



②参観日での発表

参観日に保護者に学習のまとめとして発表した。オリンピック・パラリンピックの競技や歴史をテレビリポート風に保護者にむけて発表した。イメージマスコットの「ミライトワ」「ソメイティ」の紹介では衣装を児童がつくり、クイズ形式で名前等を尋ねるなど工夫をした発表を行った。



6 成果

- 調べ学習やまとめる学習を通して、オリンピック・パラリンピックに対する興味・関心が向上した。
- オリンピック・パラリンピックに対する知識量が増したり、視野が広まったりした。
- パラリンピックは、障がい者だけがする競技でなく、障がい者と健常者がともにできるスポーツだということを理解できた。
- 第6学年は保護者や他学年に発表することができた。自分たちから情報を発信することで、より深くオリンピック・パラリンピックについて理解することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 「I'mPOSSIBLE」の映像資料を活用して授業の導入ができた。
- 学級や学年をこえて、オリンピック・パラリンピックの交流を図ることができた。
- 自主学习などを通して、オリンピック・パラリンピックのことを学ぶ主体的な姿が見られた。
- 調べたことをまとめるだけで終わらず、アウトプットする場を設けたことで、より理解を深めることができた。

8 課題等

- 掲示物などを通して、オリンピック・パラリンピックの見える化を図り、児童の関心をより高められるとよかった。
- 第4～6学年での取り組みとなってしまうため、第1～3学年ができることを模索し、実践できればよかった。

実践事例 8 飯塚市立二瀬中学校（福岡県）

1 実践のテーマ

指導者によるオンライン講演会

2 対象者

全校生徒 322 名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間、道徳

4 目標（ねらい）

横内昭展氏が、中高生時代から、プロ、そして指導者として、どのようにキャリアを積んできたか、また今後、日本代表監督としての世界を相手にした戦いの中で、どのようにプレッシャーと向き合っていくか、をテーマとした講演を聞くことを通して、これからのグローバル社会の中で、自ら進んで行動しようとする態度を育成する。

5 取組内容

事前学習 12月2日（水）道徳にて

池江璃花子選手の動画を活用し、オリンピックへの関心を高める。

実践 12月14日（月）

13：45～各学級にて、動画を鑑賞（日本サッカー協会より）

14：00～講演会開始（Zoom）

内容：

（前半）

- 現在の日本代表での役職など自己紹介
- 自分自身のサッカーとの出会い
- 中学生の話
- 進路選択
- 選手として（マツダ SC、プロ契約、サンフレッチェ広島）
- 現役引退、コーチとしてのキャリアを選択

（後半）

- サッカー日本代表のコーチとして
- コーチとして、一番大事にしていることは何か
- オリンピック・パラリンピックについて思うこと

○オリンピックという国際舞台で活躍する選手たちのこと

○オリンピックにける意気込みや目標

(質疑応答)

○ケガをして約2年出場できなかった時に、どのように乗り越えたか

○オフト監督とのコミュニケーションをどのように図ったか

○選手を選ぶ時にどのような視点で選ぶか

(最後に)

東京オリンピック世代の選手たちが企画・制作した映像 (Ready for the future) を視聴

6

成果

生徒の感想より (横内氏の講演を終えて)

○長年にわたってサッカーをやめたいとか、嫌いと思うことなく続けている姿に、私も見習わなくてはいけないと思いました。

○後悔をしないように、一日一日を大事にすることが印象に残りました。

○選手を選ぶときに、技術はもちろんだけど「自立できる人」を選んでいると聞き、私も自分で考え、自立したいと思いました。

○約2年間サッカーができなかった時期があっても、「やめたい」じゃなく「今すぐやりたい」という気持ちから、本当にサッカーが好きなんだと分かりました。

○自分は吹奏楽部に入っているのですが、お話を聞いて、本当に基礎が大切なんだと気づかされました。

○「迷いがなかった」という言葉に驚きました。また、〇〇一筋！というほど熱中することが見つかっていないので、目の前にある一つ一つを一生懸命に努力していきます！

7

実践において工夫した点 (特色)

新型コロナウイルス感染症が関東で増加傾向であったため、Zoomによる講演会を実施した。9月に行われた合唱コンクールでも、体育館での合唱を各教室に配信して実施しており、日本サッカー協会の方が有料版をお持ちだったので、時間制限もなく約1時間の講演会を実施することができた。また、横内氏の要望により、生徒たちの姿も見ながら講演を行いたいということで、画面には各教室の生徒たちの姿を映して実施した。

8

課題等

本来であれば、実際にご来校いただき、講演を行っていただくことが一番であるが、仮にご来校いただいたとしても、全校生徒を体育館に集合させることが難しいことが予想されるため、やはりZoomの活用が必要だと考えられる。

実践事例 9 岡山市立上南中学校（岡山市）

1 実践のテーマ

2 種類のバスケットボール選手との交流を通じた障がい者理解

2 対象者

第1学年 57名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

その他：総合的な学習の時間

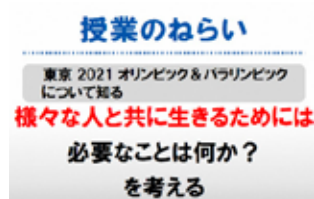
4 目標（ねらい）

- パラリンピックの選手と交流を通して福祉について学び、障がい者に関わらず、他者への理解を深める。
- トライフープの選手と交流をして、東京五輪にむけてオリンピック・パラリンピックへの理解を深める。

5 取組内容

(1) 事前指導

オリンピックとパラリンピックを題材とした教育プログラムを使用してオリンピックとパラリンピックについて学習し、共生社会に向けた授業を行った。



- ①福祉の説明、今後の流れ、②障がいの種類、③肢体不自由、高齢者、④聴覚障がい、視覚障がい、⑤パラリンピックの競技の種類、⑥班ごとに調べ学習

<調べる内容>

パラリンピックの歴史、パラリンピックの選手、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、障がい者の仕事、射的、車いすバスケット、活躍している障がい者、ゴールボール、ボッチャ、盲導、アーチェリー

- (2) 体育の授業でバスケットボール
- (3) 講演会および車いす体験
トライフープ岡山（プロバスケットボールチーム）
岡山 WBC ウィンディア（車いすバスケットボールチーム）



- (4) ポスターセッションによるまとめ



6 成果

（生徒の感想から）

- 車いすを操作することが思っていたよりとても大変で、シュートも全くできなかったけど、普段体験することができないことが体験できてよかった。
- 楽しかったし、学ぶこともできたので貴重な体験をすることができた。
- 車いすをこぐことが大変だと初めて分かりました。車いすで生活していることがすごいと思いました。車いすになると両方の選手が同じくらいの強さになったのはとても感動した。

7 実践において工夫した点（特色）

- 講演を聞くだけではなく、実際に自分たちで体験できるように車いすを借りてきた。
- 教員が司会進行をするのではなく、学級委員長が司会進行をすることによって、選手に親近感を持たせることができた。
- 一学期からの関連付けた授業・体験・ポスターセッションによるまとめまで一連した学習の流れをつくった。

8 課題等

今年度はコロナ感染拡大防止のための休校があったため、総合的な時間の確保があまりできなかった。

オリパラの「開催」について考える取組

全校生徒 140 名

【学校における活動】

教科名：保健体育

行事名：クラスマッチ、オリパラリモート勉強会

オリンピックの意義や歴史、オリンピズムについて深く学ぶことで、生徒たちの中に、多くの「気づき」が生まれ、人生をより良いものにするためのきっかけをつくる。また、新型コロナウイルスによって延期されているオリンピック、パラリンピックを「開催」、「成功」させるために、何が問題でどんなことが必要なのかを学び、今の自分たちにできること、すべき行動を考えさせる。そして、開催された時の喜びや感動を増幅させ、運動への興味・関心、スポーツを楽しむ心の醸成をはかる。

取組①

オリンピック、パラリンピックの意義、歴史について学ぶ授業を行った。昨年もオリンピック・パラリンピックについては授業で学習したが、今回は意義や歴史に加え、北九州ゆかりの選手や、事前キャンプを行う国、新型コロナウイルスによる影響などを学習した。

取組②

新型コロナウイルスによる開催延期の現状について学習し、新型コロナウイルスとは何なのか、1年後の開催可否などについて学び、話し合い、課題点を自分たちなりに見つけ、今の自分たちに何ができるかを考えワークシートにまとめた。

取組③

体育の授業ではオリンピック種目を取り扱い、授業とオリンピックの繋がりを意識しながら授業を進めた。また、体育大会の代替えとしてクラスマッチを企画し、

オリンピック・パラリンピックについて

① オリンピック・パラリンピックとは
・歴史やオリンピック精神について

② 東京2020で事前キャンプを予定している国と競技は？

タイ → 卓球、テコンドー
フィジー → トランポリン、水泳
イギリス → 柔道、ラグビー
ドイツ → 柔道、バドミントン

③ 東京2020の選手は？

山本 聖子 → バラア・チエリ
方田 司 → 柔道
熊井 亜由子 → 選手

本校の運動部活動であるバスケットボール、サッカー、卓球の3競技とリレーを加えた4競技で競う、クラスマッチ「校内オリンピック」を開催した。「する、見る、支える」をスローガンに掲げいろいろな側面からスポーツと関わるように指導した。

取組④

「岡田隆さんとのリモート勉強会」を3年生対象におこなった。事前学習として岡田氏の紹介を行った後に、どんな勉強会にしていくかを生徒主体で話し合った。その中で質問内容、質問者、司会者、シナリオなどを決定し準備を進めた。

○勉強会では生徒が質問を行い、岡田氏に答えてもらう形式を取り、ズームを使用してリモート形式で実施した。

○生徒は岡田氏の回答をワークシートにまとめる。

○回答に対する追加の質問も受け付け、生徒が積極的に発言できる機会をつくった。

勉強会では、オリンピックの現状、選手たちの状況、運動の大切さ、健康に生きていくポイントを学んだ。そして、後日、オリンピック、パラリンピックや健康について、考えたこと、学んだことを発表しあい、今の自分たちに何ができるかを再認識させた。また、その様子を撮影したものを編集し、他学年の授業でも取り扱い、全生徒が同じように学習できる機会を設定した。

取組⑤

男子柔道-66kg級の阿部選手と丸山選手の最終選考戦をVTRで観戦し、オリンピックにかける選手の思いや努力を重ねる姿、コロナ禍でもひたむきに目標に向かって力を尽くす姿を見て感じたことや、これからの自分について感想を書いた。

取組⑥

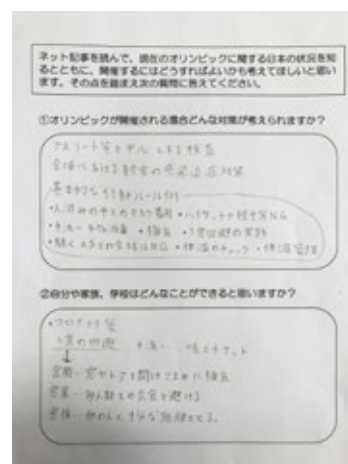
オリンピック注目選手紹介、パラリンピック競技紹介

スポーツは「する、見る、支える、知る」の観点から「オリパラを知る」をめあてに調べ学習を行った。タブレットを活用して、注目選手、気になるパラリンピック競技をそれぞれ一枚のプリントにまとめた。また、出来上がったものをグループ内で紹介し、情報を共有した。



取組⑦

オリンピック・パラリンピック教育のまとめとして、コロナ禍である日本の現在の状況をニュースの記事をもとに学習し、オリンピックの開催の可否について考えさせた。そのうえで「開催するためにはどんな対策が考えられるか」「自分や家族、学校ではどんなことができるか」をまとめさせた。



6 成果

本取り組みの目標は以下のとおりである。

- オリンピックの意義や歴史、オリンピズムについて深く学ぶこと。
- 人生をより良いものにするためのきっかけをつくること。
- 新型コロナウイルスの影響によって延期されているオリンピック・パラリンピックを「開催」「成功」させるために、何が問題でどんなことが必要なのかを学ぶこと。
- 今の自分たちにできること、すべき行動を考えさせること。
- 開催された時の喜びや感動を増幅させ、運動への興味・関心、スポーツを楽しむ心の醸成をはかること。

城南中学校では7つの取組を実施し、上記の目標をおおむね達成することができた。

取組①では歴史や意義、オリンピズムを学習するとともに地元北九州がどんな国と連携を図り、どんな取り組みをしているのか、また、今までどんな選手を輩出し、東京2020大会にどんな選手が出場予定になっているのかを学習することで、親近感を沸かせることがで、興味や関心を抱かせることができた。

取組②ではオリンピックを延期させた新型コロナウイルスについて学習し、感染拡大防止には一人一人の行動が大切だということを再認識し、さらにはコロナ差別にも触れ国際理解、平和に共存することなどを提唱するオリンピズムと絡めて学習することで、人権問題についても考えることができた。

取組③では中体連や体育大会が中止になり生徒の活躍の場が減った事、また、協力して何かをやり遂げるといった仲間との一体感を感じる瞬間を一つでも体験させたいという思いから取り組みを計画した。「する、見る、支える」をスローガンに掲げることで生徒一人一人が主体的に考え行動し、お互いの頑張りを認め合いながら協力して運動に親しむことができた。

取組④ではオリンピック選手を一番近くで見守ってきた岡田隆さんに自粛中の選手の様子や練習再開後の様子、気持ちの変化、目標に向かって頑張る姿など普段知ることのできない秘話を中心に、体の成長について、健康に生きるための秘訣、睡眠の重要性、プライベートな内容など多岐にわたって質問に答えていただき、多くのことを学ぶことができた。

取組⑤ではオリンピック選手の選考会を題材にし、選手たちが人生をかけて挑んでいる姿、それを支えている家族や仲間の姿を見ることでオリンピック・パラリンピックに対する興味や関心を増大させることができた。また、「スポーツは感動を与える」ということ、「頑張ることは素晴らしい」ということを感じさせることができた。

取組⑥では「する、見る、支える」のほかに「知る（調べる）」もスポーツとの関わりかたの一つであるということを再確認し、自分の注目選手を調べ、発表することでさらに知識を広げ、興味や関心を高めることができた。また、パラリンピック調べに関しては障害者スポーツについて調べ学習を行うことで、障害を持つ方々への理解、マイナスと思われがちな障害をプラスの方向に転換している姿を知ることで、尊敬の念が生まれ共生社会への一歩となったと感じた。

取組⑦ではオリンピックを開催するにあたっての対策や自分たちにできることを考えることで、新型コロナウイルスへの正しい対処法や今後の行事の開催について一人一人がどんな対策ができるかなどを考える力を身につけることができた。

全体を通して多くのことを学ぶことができ、オリンピック・パラリンピックの開催について、興味や関心が高まったのは間違いない。この取り組みが学校生活や、今後の行事に生かすことができるように継続して取り組んでいきたい。

7 実践において工夫した点（特色）

オリンピック・パラリンピックへの興味や関心を高めることが第1の課題であった。オリンピックというかけ離れた世界を身近な事と結びつけ、少しでも親近感を持てるように工夫した。

また、昨年オリンピック講演会を行っており、ロンドンオリンピック銅メダリストの西山将士さんを招聘して講演会を行ったことが、今回のオリパラ教育と結びつき、生徒たちの心に響きやすかったとも考えられる。

新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、岡田隆さんの講演会を急遽リモート形式に切り替えた。3年生のみの対話形式にしたこともあり、講演会では体験できない近い距離感で実施することができた。

調べ学習においてもタブレットが導入されたことにより、調べ学習がスムーズに進み、全体を通して収穫の多い取り組みとなった

8 課題等

講師へのアポイントがうまくいけばどの学校でも実施できる内容であり、リモート形式で行うことができるので費用も抑えることが可能である。大きな課題もなくスムーズに行うことができた。

実践事例 1 岩泉町立小川中学校（岩手県）

1 実践のテーマ

校内ボッチャ大会の開催を通した「支える」スポーツについての学習

2 対象者

第3学年 14名、教職員 14名、保護者 6名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

行事名：Kogawa Boccia Festival

4 目標（ねらい）

- 「する・みる・支える・知る」の「支える」の視点からスポーツを捉える。スポーツを「支える」の視点を学び、多様な関わり方を知る。
- スポーツを楽しむ心を育み、生涯にわたって自分に合うスポーツとの関わり方を考える機会にする。

5 取組内容

○保健体育授業

【授業内容】

- 運動やスポーツへの多様なかかわり方の復習
- 支えるという視点からのスポーツとの関わりについての学習
- Kogawa Boccia Festival（パラリンピック競技であるボッチャの大会を実施）



【企画・運営内容】

	競技運営部	審判部	記録・広報部
①	競技要項、開閉会次第作成	ルール設定	案内文書作成、活動の記録撮影
②	競技要項作成、会場図作成	チーム割、タイムテーブル作成	参加者集計、Facebook にイベント案内の掲載案作成、活動の記録撮影
③	審判部と調整し、競技時間の設定	競技運営部と調整し、タイムテーブルの作成	Facebook、新型コロナ対応案作成、参加者アンケートの作成
④	リハーサル①、調整		
⑤	リハーサル②、調整		
⑥	イベント「Kogawa Boccia Festival」運営		

○講師を招いての講演

【講演内容】

講師：大久保訓氏（作業療法士）、山内貴雄氏（アスリートキャリアコンサルタント）

講演：それぞれの立場から見た「スポーツを支える」ことについての対談
東京 2020 大会から感じてほしいこと、期待すること

演習：作業療法士体験、講師の方を交えたスポーツトーク

6 成果

本事業を通して、生徒の感想から普段経験することのない「支える立場」に立ちスポーツに関わることで、今回行った企画・運営以外にも様々なスポーツへの関わり方があることを学ぶことができた。支える側の楽しさ、喜びを知ることによってスポーツに関わることへの意欲が高まり、自分に合った関わり方を模索する態度を養うことができた。また、支える側を経験することで、日常生活でも自分の小さな行動でも誰かの助けになることを学んだ。

7 実践において工夫した点（特色）

- イベントを実施するための生徒組織を設置し、生徒の手でイベントの企画を行った。
- 組織編成についても、岩手県バスケットボール協会等から助言を受けて設置した。
- コロナ対策、案内文書についても、教職員からアドバイスを受けながら作成した。
- 業種の異なる二名の講師から、「人を支える」という視点について聞き、考えを深めることができた。
- イベント企画・運営の際に大切にすべきこととして、「プレーヤーズセンター」の考え方や、「来場者に伝えたい思いを持つこと」について生徒自身が考える機会を設定した。

8 課題等

- 年度が始まってからの企画・運営であったため、時数の確保に苦労した。保護者も参加するイベントであったため、今後は総合や特別活動等の時数とのバランスを整えていく。
- 今年度はイベントを平日開催としたが、年間計画に授業参観や親子レクとしての実施を検討し、たくさんの保護者や地域の方々が参加できるような体制を整える。

実践事例 2 茨城県立常陸大宮高等学校（茨城県）

1 実践のテーマ

異文化交流を通じたボランティア精神の育成

2 対象者

第1学年 71名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

行事名：オリンピック・パラリンピック教育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

(1) 多様性と国際理解～異文化交流～

常陸大宮市とタイアップし「パラオ共和国」について学習し、ICT機器を活用した異文化交流（異文化理解）を行い、相互理解を深め来年の東京オリンピック、パラリンピックを多角的な面でより一層楽しめるようにする。

(2) 異文化交流を通して

ICT機器を活用した交流を通して、自身がおもてなしを行うために必要なスキル等に気づきボランティア精神を育み、おもてなしの心を醸成する。

5 取組内容

本校では2年前に、パラリンピック柔道選手の講演・実演を実施した。また、常陸大宮市は、パラオ共和国のホストタウンとして2017年～2020年にかけてパラオ共和国研修生を受け入れてきた。2018年～2019年には事前キャンプとして本校を含めた市内の小・中学校とパラオ共和国選手団と陸上・水泳・柔道・レスリングの競技を通して交流を実施し、2018年～2020年にはパラオフフェアに本校商業科が出店するなど多くの交流を行ってきた。また、市とのタイアップとして外務省青年プロジェクトやカウントダウンボード製作やパラオアレンジフード販売などを実施してきた。

今回の事業としては常陸大宮市とタイアップし、ICT機器を通して「異文化交流（異文化理解）・おもてなし」を理解し、来年の東京2020大会をより一層楽しめるようにする。



6 成果

アンケート結果

- 「オリパラの授業が楽しかった」「オリンピックを見に行きたい」などの声が多くあり、興味・関心をもつきっかけを作ることができた。
- 自身が今後必要とするスキルとして「英語力」を挙げる生徒が多く、横断的な教科指導のきっかけとなった。
- 異文化交流を実施したことでパラオ共和国の選手やカルチャーなどに興味・関心をもつことができ、相互理解等を充分成長させることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

- ICT 機器を活用し TV 電話交流を実施した点。
- TV 電話交流では、事前に各クラスで意見を集約した質問をビデオ撮りし、データを事前にパラオ共和国元研修生にメール送付していた点。
- 1 学年全員での交流にしたことで、学校活動の少なかった生徒間で他者を理解するなど相互理解の機会を設けた。
- 常陸大宮市とのタイアップにより、現場での生きた教材を活用できた。

8 課題等

- 日程等が感染症拡大によりなかなか決まらず、学習計画が定まらなかった。
- ICT 機器を有効活用できない部分があり、課題となった。
- この事業は体育的活動とだけ結びつけるのではなく、様々な教科と横断的な指導を行うことのできる事業と感じた。

実践事例 3 昭和学院秀英中学校（千葉県）

1 実践のテーマ

世界のコンニチワを広めよう

2 対象者

第2学年 186名

3 展開の形式

【学校における活動】
その他：特別活動

4 目標（ねらい）

競技参加国や観戦に訪れる各国の人々へのおもてなし方法を考えることで、世界に目を向け、理解するきっかけをつくる。

5 取組内容

- ① 1班3～4人とし、タブレットを用いて10分間でなるべく多くの世界のコンニチワを探し、他のグループと異なる国・言語のコンニチワについて得点とするルールを設け、学級対抗のゲームとした。
- ② ①で見つけた世界のコンニチワについて、以下2点について考案した。
 - (i) 大人から子供まで多くの人に覚えてもらえるような、手作りのゲーム
 - (ii) 学校所在地が会場である幕張メッセに向かう道路沿いにあることから、学校前を通る人々が喜ぶような世界のコンニチワを活用したおもてなし方法
- ③ ②の意見を集約し、学年全体での取り組みとして、(ii)の、例年文化祭時に作成する案内看板にヒントを得た“世界のコンニチワ看板”について具体的なデザインなど企画案の作成を行った。

6 成果

- あいさつを調べることで、1つの国に複数の異なる民族が共存していること、使用言語も複数存在することといった多様性への理解を深めることができた。
- ゲームや看板の作成により、自分達でも世界を伝えることや、大きな国際大会に関わるおもてなしができることへの気づきを得られた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 生徒が学びを楽しみながら実施できるよう、調査をゲームとして実施した。
- オリパラ大会終了後も世界の人とのつながりに目を向けることができるように、次年度以降でも継続可能な活動の企画案を作ることとした。

8 課題等

挨拶などを学ぶ場合、文字の情報は得やすいが、特になじみのない言語についての発音の調査や理解が難しいため、ネイティブの協力をどのように得られるかを考える必要がある。

実践事例 1 鹿嶋市立鹿島小学校（茨城県）

1 実践のテーマ

地元ゆかりのスポーツを活用した共生社会についての学習

2 対象者

第6学年 112名

3 展開の形式

【学校における活動】

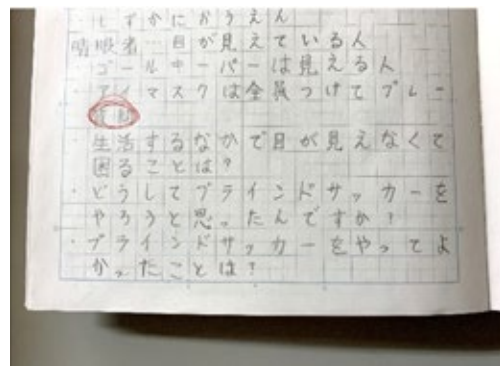
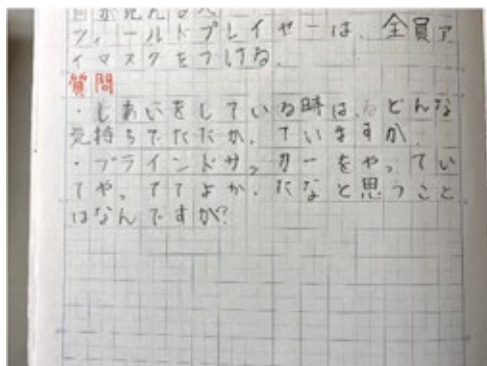
その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

パラリンピックの競技である「ブラインドサッカー」を、実際に見て体験し、選手の話聞いて、パラリンピックとは障害をもつ人にとって、どんな思いが込められたものなのかを理解し、偏見のない共生社会への関心を深める。

5 取組内容

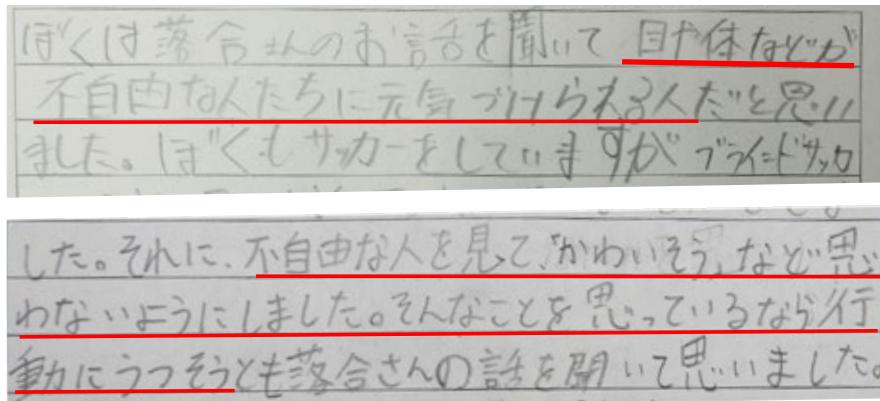
- オリンピック・パラリンピック教育推進事業推進校に決定し、ブラインドサッカー講師落合啓士氏を招くことに決定した。オンラインでの学習形態になることが決まり、市教育委員会の担当者と機器の確認や当日の流れを作成した。各クラスから進行役を選出し、昼休みに当日の流れを確認し、リハーサルを行った。※オンラインのため児童には声の大きさにいつもより気を付けるように指導した。
- ブラインドサッカーに関するDVD（ルールや特徴について）を各クラスで視聴し、落合さんに聞きたいことや質問したいことをまとめて意欲を高めた。



- 2時間目、3時間目で6年生2クラスずつ、落合啓士さんによる特別講演会を開催。落合さんのお話のあと、児童が質問をしたり、代表者がお礼の言葉を述べたりした。終了後、事後アンケートと落合さんへのメッセージを記入した。



〔落合さんへのメッセージ〕



「途中から目が不自由だってことを忘れていた。」と話す児童が多かった。障害だけに目を向けず、「落合さん」の話を一生懸命聞いていたことがわかる。⇒共生社会への第1歩

○道徳の「義足の聖火ランナー」の学習で、クリス・ムーンの生き方や考え方に触れ、落合さんのことを思い出した。また、他のパラリンピック選手についても紹介した。

○6年生の体育の学習で、サッカーを学習した。2クラスに分かれ、体育の時間に体育館で、実際にブラインドサッカーを体験した。新型コロナウイルス感染症について県内に緊急事態宣言が発令されたため、少人数でラン・パス・ドリブルのみを体験した。また、共用の目隠しは使わずに、紅白帽子を深く被って目隠し代わりとした。何かあったときにすぐに外せる安心感も児童にあったようである。

〔ブラインドサッカーを体験した感想〕



○ボールがどこにあるか分からなくなったとき声をかけてもらえると位置が分かって助かった。

○声のかけ方も難しかった。どうしたらきちんと伝わるか悩んだ。

○落合さんが言ったとおり、自分の立ち位置を見失わないように頭の中でイメージすることが大切だと思った。

○直前に女子も授業でサッカーを経験していたため、抵抗は少なかった。

○オリンピック・パラリンピックについてのアンケートに回答した。



6 成果

パラリンピックは「聞いたことはあるが、見たことはない」という児童が9割を占めた。パラリンピックの良さやパラリンピアン頑張りを感じてほしいと思い、今回の事業に応募した。ブラインドサッカーを直接、落合さんに教えてもらうことはできなかったが、オンラインで話を聞いたり、質問をしたりすることができた。学習後の感想の中で、「目が不自由なことはかわいそうなことではなく、個性なんだと思った。」「落合さんが「目が不自由で良かった」と言ったのを聞いて、ポジティブに捉えることの大切さが分かった。」と共生社会への理解が、児童の中に着実に芽生えていた。

【実施後のアンケート（対象：6年生 108名）】

○実施前はブラインドサッカーを全く知らなかった56人、少し知っていた46人、知っていた6人

○ブラインドサッカーに興味がある96人、興味ない12人

今回の学習を通してブラインドサッカーを知り、「興味がある」と回答した児童が全体の88%に上ることから、パラリンピック競技への関心を高めることができたと考える。

7 実践において工夫した点（特色）

鹿嶋市は、サッカーの街である。鹿島アントラーズのホームタウンであり、サッカー人口も多い。自分の街に鹿島アントラーズがあることを誇りに思う児童も男女共に少なくない。そのような「サッカー」を通して、共生社会について学べることはこの上ない機会であった。また、本校児童は4年生時に、福祉体験の一環として「アイマスク体験」を行っている。アイマスク体験の経験から「見えない恐怖」について身をもって知っている。以上2つのことから「ブラインドサッカー」を経験させることは、児童の学びに繋がりと考えた。

8 課題等

ブラインドサッカーについては十分に考え、感じることはできたが、パラリンピックの競技はそれだけではない。他のパラスポーツにも関心を向けさせることが必要だったと考える。例えば、ブラインドサッカー講習会后に他のパラスポーツ

ツを紹介し、興味のあるパラスポーツについて深く学習する機会を設ける。その後、ジグソー法等を用いて様々なパラスポーツについて理解を深めるなど、共生社会の理解により効果的な方法があったと考える。

実践事例 2 群馬県立安中総合学園高等学校（群馬県）

1 実践のテーマ

高齢者を対象としたボッチャルールの作成

2 対象者

生活文化系列福祉系 第2学年 14名、第3学年 12名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：介護福祉基礎、介護実習、総合研究

4 目標（ねらい）

- 福祉について学んでいる生徒に、パラリンピックの意義や歴史等の基礎知識を学ばせ、興味関心を持たせたい。また、身近な人々にパラリンピックの魅力を伝えられるようになって欲しい。
- パラリンピック競技種目である「ボッチャ」を高齢者福祉施設やイベント等で多くの方々と共に体験することで、共生社会のあり方について考えさせたい。

5 取組内容

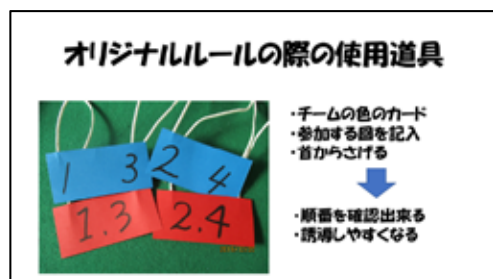
国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」を活用して、パラリンピックの意義や歴史を学び、パラリンピアン者の日常生活からバリアフリーについても考えた。また、昨年度の総合研究で取り上げたパラリンピック競技種目である「ボッチャ」を、今年度も継続して他施設や地域のイベントで実施し、多くの方々に体験していただく計画をしていたが、新型コロナウイルス感染予防対策のため各種イベントが中止となり、施設訪問もできなかったため実施することができなかった。

昨年度の総合研究では、テーマを「2020 パラリンピック ～障がい者スポーツを広げよう～」とし、パラリンピックの意義や歴史についての調べ学習を行い、パラリンピック競技種目である「ボッチャ」を多くの方々に広める活動を行った。ボッチャセットをガチャのカプセルや段ボールを使って作成し、高崎市社会福祉協議会から競技用セットをお借りし、2種類を使って高齢者福祉施設のレクリエーションでボッチャ体験を計画し、デイサービスや特別養護老人ホーム入所の利用者さん、職員の方々と一緒に楽しむことができた。



6 成果

高齢者の方々にボッチャを体験していただき、ボッチャは誰でも参加できる競技であることを実感することができた。また、認知機能が低下している高齢者の方には正式ルールを理解することが困難だったと感じ、より楽しんでいただきたいと生徒達はオリジナルルールを考えたり、投げる順番がわかりやすいような工夫を提案することができた。障がいの有無に関わらず、一緒に競技を楽しみたいという生徒の意識の変化を感じることができた。



- * 中心に判別しやすいジャックボール代わりのマークをつけた。
- * 握力が低下している高齢者にも投げやすいようマークまでの距離を近くした。
- * 1回に多くの方に参加してもらえよう円に座ってもらい、待ち時間を短縮した。

7 実践において工夫した点（特色）

本校では、3年次に授業の一環として長期インターンシップを実施しており、例年10施設以上の高齢者福祉施設で実習をさせていただいている。今回のボッチャ体験は初めての試みだったため、日頃から本校の教育活動を理解し協力していただいている実習先の中で、生徒が自転車で移動可能な施設に依頼した。事前打ち合わせを十分に行ってから実施できたので、職員の方々にも協力いただき、スムーズに実施することができた。

新型コロナウイルス感染症が終息に向かい、例年どおりの活動ができるようになることを期待している。

MEMO

実践事例 3 鈴鹿市立一ノ宮小学校（三重県）

1 実践のテーマ

伴走者の講演会を通したパラリンピックについての学習

2 対象者

第5学年 84名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- パラリンピックについて理解する。
- 出会い学習を通して、障がい者の方やそれを支える方々の思いを知る。
- 自分たちの身の回りの人を支えていくためには、自分たちは何ができるのか考え、行動することができる。

5 取組内容

「事前学習」

内容

- パラリンピックの意義を中心に学習する。
- パラリンピックを題材にして人権ポスターを描く。



「講演会」

内容

- 堀内規生さんによる講話
- NHKによる取材ビデオの視聴。
- ガイドランナー体験。
- 講話や体験を受けての感想、質疑応答。

「事後学習」

内容

○堀内さんの講話を受けての振り返り。

○講話や体験から得たことを模造紙にまとめる。

6 成果

○ポスターや講演会を通して、パラリンピックについて興味・関心を持つことができた。

○ガイドランナーの体験を通して、事前の講話内容（相手を信頼することの大切さや難しさなど）をより理解することができた。

○実際に障がい者の方々を支えている方の話を聞くことで、自分たちには何ができるのかをより具体的に考えることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

障がい者の方本人だけでなく、支えている人と出会うことで、これからの自分たちの目指す姿をより具体的にイメージすることにつながった。

8 課題等

○今年度は休校の影響もあり、この時期にしか実施することができなかったが、より子どもたちが、しっかり準備し、ゆっくり振り返られる時期に設定する。

○事業展開に見通しを持ち、計画的に進めていく必要がある。（事前学習の内容等）

実践事例 4 京都府立東稜高等学校（京都府）

1 実践のテーマ

パラゲームの作成

2 対象者

第1学年 38名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な探究の時間

4 目標（ねらい）

新たなパラゲームを考え出す過程で、公平性や平等性の観点からパラリンピックやパラアスリートへの理解を深め、自身が取り組んでいるスポーツや生涯スポーツへの興味関心が高まることを期待する。

5 取組内容

第1学年総合的な探究の時間（本校ではスポーツ探究・ライフワーク探究・サイエンス探究・コミュニケーション探究・ソーシャル探究・データ探究の全6コースに分類する）の内、スポーツ探究を選択した生徒を対象とし、生徒が新しいパラゲームを考案し、実践発表する取組を行った。前期クール全6回、後期クール全6回で行う。今回は前期クールに該当する。

10/16【1回目】オリエンテーション

①パラリンピックの概略説明

②探究活動内容説明

※どんなハンディキャップを想定したパラゲームにするのか、そのハンディキャップを想定した安全なルールを作ることができるのか、また誰もが一緒に楽しめるかつ競技性も確保できるのかなどのポイントの説明。

※実際のパラゲームの例を動画で視聴し、イメージをもつ。

③グループ作り（6～7人グループ×6班）



10/30【2回目】グループ活動

①グループのメンバー各自が持ち寄った案をまとめ、グループで1つのパラゲームを考案する。

※基本的には学校にある器具や道具を使って行うという条件の中で、新たなパラゲームの名称や基本となるルールを策定する。
※体育館で実施できるルールや物品を考える。



11/6【3回目】グループ活動

①具体的な内容の検討（分担や必要なものなど）

※グループで考案したパラゲームを実際に行ってみる。その中で出てきた課題や改善点を再度グループで検討する。特に安全面は配慮できているか、ルールどおりに行えているか、必要な物品を確保できるかなどを検討する。



11/13【4回目】リハーサル（発表準備＋修正）

①前回の活動時の課題や改善点を踏まえ、パラゲームの最終確認を行う。発表順の決定や発表方法の説明を行う。



11/20【5回目】実践発表

3 グループ発表（1 グループにつき 10 分）

12/11【6回目】実践発表

残り 3 グループ発表（1 グループにつき 10 分）

6 成果

- 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今回は講師をお招きしてのオリパラ教育講演会は実施できなかったが、第1学年総合的な探究の時間を使い、新たなパラゲームを考えるという取組のたたき台ができたことは成果と言える。
- ハンディキャップの想定は一定できていたように感じる。パラアスリートへの理解や、自身の生涯スポーツへの気づきとしてはよかった。
- 「実践発表」という形をとることで、総合的な探究の時間の発表の場を確保した。

7 実践において工夫した点（特色）

- グループ決めのときに、『クラスや男女を分ける必要がない。』という文言を強調することで、パラゲームは誰でも一緒に楽しめるものであるという意識付けをした。
- 実践発表の方法は、発表グループが違うグループにパラゲームを教えながら行わせる、という形を取った。例えばグループ1とグループ2をペアとし、グループ1のパラゲームの内容をグループ2がプレイする。グループ3～6はその様子を評価し、別途配布のチェックシートに記入していく。こうすることで、ただ単に全体の前でパラゲームを実践して終わりというものではなく、他のグループに指示を出したり、ルールを教えたりするなどの運営の難しさ、伝えることの難しさを感じさせ、グループ内での役割分担を明確にすることで、それぞれの責任を意識させた。

8 課題等

- ハンディキャップを想定したルールの中で、プレーの失敗に対して笑いが起こったり、力任せにプレーで安全面が軽視される場面があった。実際にパラアスリートのプレーを見て笑ったりしないことと、安全なルールの中で全力を出すことは競技として大切なことだが、いわゆる“ノリ”で行ってもよいということにはならないということを強調する必要がある。
- 第1回目のオリエンテーションで実際のパラゲームの動画を視聴した上で新たなパラゲーム作成に取りかかっているが、生徒の実態から難易度が高いように感じられた。6グループのうち、パラゲームらしい形となったのは3グループだった。
- 実践発表後の各個人の振り返りやグループ内での振り返りの時間が不足してしまった。

M E M O

実践事例 5 岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

1 実践のテーマ

パラスポーツについての学びと伝える難しさの経験

2 対象者

第1学年 80名、第2学年 79名、第3学年 79名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：専門体育、スポーツⅥ、スポーツ総合演習

その他：生徒による地域ワークショップでの発表

4 目標（ねらい）

オリンピック・パラリンピック教育を実施することにより、生涯を通してスポーツの振興発展にかかわることができる資質や能力を育てる。また、小学校との連携教育において障がい者スポーツを児童に指導することにより、オリンピック・パラリンピックへの関心を高めるとともに障がい者への理解を深め思いやりの心を育てる。

5 取組内容

（1）オリンピック・パラリンピック教育の出前授業

日本体育大学の乳井勇二先生より、3学年各1回ずつ講義を受講し、オリンピック・パラリンピックの精神、歴史、現状と課題などグループワークやディベートにより、オリンピック・パラリンピックに関する興味関心を高めた。

テーマ：「パラリンピックと共生社会」、「フェアプレイ精神」、「スポーツと経済」



(2) 障がい者スポーツの講習会

ゴールボールやシッティングバレーボール、ブラインドサッカーといった障がい者スポーツの講習を行い、障がい者スポーツへの理解を深めるとともに、小学校との連携教育につなげる。また、生徒自らが指導することによって将来、障がい者スポーツの指導者を育成する。



(3) 小学校との連携教育での障がい者スポーツ（2020年8～12月）

本校体育科が平成28年度より始めている近隣の小学校との連携教育において、障がい者スポーツ（ゴールボール、ボッチャ）を児童に指導することにより、オリンピック・パラリンピックへの関心を高めるとともに障がい者への理解を深め思いやりの心を育てる。さらに、生徒自らが指導することによって、将来の障がい者スポーツの指導者を育成する。

○内容

①指導案作成、②プレ授業、③指導案修正、④プレ授業、⑤小学校でのプレゼンテーション、⑥実施

※実施前準備：プレゼンテーション、しおり作成、DVD作成、ルールブック作成

○実施日時

2020年12月14日：玉野市立大崎小学校（第5・6学年年）

2020年12月18日：玉野市立八浜小学校（第6学年）



(4) 地域ワークショップ報告会への参加

報告会に参加し、本事業の取り組みについて生徒が発表を行った。また、他の団体の報告から、更にオリンピック・パラリンピック教育を深めていく。



6 成果

- オリンピック・パラリンピックの出前授業では、オリンピック精神や歴史について学び、今まで以上に興味・関心が高まり、オリパラが身近なものであることを実感した。さらに、グループワークやディベートを通して自ら主体となって考え、取り組むことができた。
- ゴールボールとブラインドサッカーの講習会から、視覚障がい者の方々が普段の生活の中で、いかに音が大切なものであるかという基本的なことを理解したとともに、健常者である私たちにもボランティアや競技役員など障がい者スポーツを支え、競技のサポートをする方法があることを改めて知ることができた。
- シッティングバレーボールの講習会及びボッチャ競技から、下腿不自由者の方々の苦勞と、特に上半身の力が重要であるということを理解した。また、チームやペアで話し合うこと、つまり、コミュニケーションが大切であり、まさにそれがこれらの障がい者スポーツの楽しさだと感じることができた。
- 小学校との連携教育では、障がい者スポーツの指導を通して、児童に身体を動かすことの素晴らしさやスポーツ、特に障がい者スポーツへの理解を深めさせることができ、地域における社会貢献の一助となった。指導案を作成しプレ授業、それをまた修正し取り組むことで、小学生の立場に立って物事を考えることや準備することの大切さを知ることができた。また、新型コロナウイルスへの対応など、感染症対策を考え実施することも今後の新しい生活様式、コロナ禍のスポーツ活動を考える上で特に勉強になった。この経験をもとに、将来障がい者スポーツの競技役員やボランティアなどスポーツを支える立場で障がい者スポーツに関わってくれる生徒が多くなることを期待している。
- 8月に予定されていたオリンピックスタジアムへの観戦は次年度に持ち越しとなったが、上記のオリパラ教育の取り組みは、本校体育科が掲げる「将来、人のために働くことのできる体育人」の育成を目指す上で非常に意味のある有意義な取り組みであった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 昨年度の体育指導法における取り組みからさらに発展させ、小学校との連携教育という本校の特色に応じた社会貢献での展開を考えたこと。
- 新型コロナウイルスの影響により、日程や内容などを考慮・変更したこと。また、感染症対策を徹底したこと。

新型コロナウイルス感染症への対策と熱中症への対策・対応（活動時の感染症対策、グループワークなど学習活動の方法）

実践事例 6 和気町立佐伯中学校（岡山県）

1 実践のテーマ

休校中から始めたオリンピック・パラリンピック学習

2 対象者

全校生徒 56 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

行事名：人権研修会

その他：道徳、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

総合的な学習の時間の柱として、人権学習に積極的に取り組んでいることから、特にパラリンピックの学習を通して多様な生き方や考え方、価値観に触れ、将来、共生社会を築く一員として他者とのよりよい関わりを考え、実践しようとする態度の育成の一助とした。

5 取組内容

(1) 5 月休校中・夏休み：オリンピック・パラリンピックを調べよう

①休校期間を利用し、家庭学習課題として認知度の高いオリンピックについての調べ学習を行った。課題は Tokyo 2020 for KIDS のホームページを元に作成し、国語科・社会科・美術科の先生にも協力を仰ぎ、日本のオリンピックと近代化の関わり、ロゴマークデザインの意味やピクトグラム誕生のきっかけについても取り上げた。

②夏休みにパラリンピックについての調べ学習を課題とした。「パラリンピックとは」「4 つの価値」「シンボルマークの意味」といった基礎的事項に加え、東京大会で実施される競技名や代表的なパラアスリートを取り上げるなどして、できるだけ興味付けができるようにした。どちらも知らないことが多かった分、「競技を見てみたい」と、強い興味を持った生徒が多かった。また、「4 つの価値の中で最も印象に残ったものを 1 つ取り上げて書く」振り返りでは、サイト内の動画を視聴してパラリンピアンが活躍する姿に思いを巡らせ、自分と重ね合わせている生徒もいた。

(2) 9 月：スポーツへの多様な関わり方を考えよう

多くの生徒にとって「スポーツはするもの」という意識が高く、また、オリンピックやパラリンピックはあまりなじみのないものであった。また、本

校は小規模校のため、体育会は選手や役員としての活動に終始してしまいがちな面があった。

そこで、体育会の練習期間に各学年で体育理論の時間を設け、「スポーツ（体育会）への多様な関わり方」について考えた。そこで、スポーツへの関わり方は「する」「見る」「支える」「調べる（知る）」の4つがあることを示し、自分にできる具体的な関わり方を考えさせた。これによって、個々に応じた関わり方を見つけることができ、スポーツへの関わり方や見方が広がった。

(3) 11月：パラリンピックの価値から考えよう

パラリンピックの4つの価値から多様な考え方を深めることをねらいとし、「I'm POSSIBLE」を教材として活用した。授業前には保健体育科、人権担当、各学年担任で教材研究を行い、各学年の実態に応じて発問や活動形態を工夫するようにした。



(4) 12/2（水）：パラスポーツ選手と交流しよう～あすチャレ！オンラインアカデミー～

学校と東京の講師（伊吹祐輔さん）をオンラインで結んで交流した。パラスポーツを実際に見たり、それに携わっているアスリートと交流したりする機会がほとんどない生徒にとって、当事者の声や思いに触れることは貴重な経験になった。

(5) 1/14（木）：パラスポーツを体験しよう～パラスポーツ体験会～

県教育庁保健体育課指導主事のご協力を仰ぎ、シッティングバレーボールの体験会を行った。オリンピック・パラリンピックについての講話の後、小学第6学年～中学第3学年までの生徒75名で縦割り12チームを編成し、おしりを床に付けた状態でのリレーやパス練習を行い、シッティングバレーボールのミニゲームで交流した。会の終末には振り返りの時間を取り、「シッティングバレーボールを体験してみて感じたことや考えたこと」「これまでの学習を通して、どのような考えをもち、自分の将来に生かしたいと思うか」の2点について自分の考えをまとめた。

(6) 1月：パラスポーツを応援しよう～OENフラッグ作成～

日本財団よりOENフラッグ事業の紹介があり、各学年でテーマを話し合っ



(7) 2/1 (月)：人権学習の発表 (1・2年) ～まとめ～

例年、3学期の参観日は、本校で取り組んでいる人権学習の発表を行っており、今年度は、パラリンピックについてのまとめも含め、学習したことや考えたことを発表した。発表の最後には全員が【my 人権宣言】を作成し、保護者やクラスメイトの前で宣言した。



6 成果

○オリンピック・パラリンピックへの興味関心の向上

この事業を始める前は、生徒はどちらかというとオリンピックへの興味関心の方が高く、パラリンピックへの興味関心は低かった。しかし、初めの調べ学習の振り返りでは、約8割の生徒が「パラリンピックを見てみたい」「パラリンピックについてもっと調べてみたい」と記述した。また、実際にパラスポーツを体験し、「パラスポーツ＝障がい者のもの」ではなく、障がいの有無に関係なく誰もが楽しめるスポーツであることに気づいたことで、パラスポーツをより身近に感じ、一層興味を持つことができた。

○多様な人や生き方、価値観に触れる機会の増加

パラリンピアン経験や生き方に触れたり、実際に話を聞いたりしたことは、少人数で固定化された人間関係の中で育ってきた本校の生徒にとっては、どれもとても印象深い経験になった。初めは、パラリンピックそのものが遠い存在であったが、実際に交流や体験をしたり、時にはクラスメイトと、また時には学年や校種を超えて交流したりすることにより、同年代でも多様な価値観があることや、担える役割があることに気づき、自分を見つめ、今後の生き方について真剣に考える機会となった。オリパラ教育を推進することで、意図的にこのような機会を多くもてたことは、生徒にとって大きな収穫だった。

○共生社会へ参画しようとする意識の向上

「I'm POSSIBLE」を使用した2回の学習を通じて、障がい者に対する見方や考え方が変化したことは明らかである。第1・2学年では、「障がい者に親切にする」など何となく理解していたことが、この学習を行うことにより、自分事としてとらえ、他者意識を持って具体的にどのように行動すれば良いか考えることができた。また、第3学年では、これら一連の学習が障がい者に対するだけでなく、広く多様性を受け入れることの大切さや、「普通」ということに対する考え方、合理的配慮の意義や必要性などにも自ら気づき、深く考えることができるようになった生徒が多く見られた。これは、本校が推進する人権教育が基盤となり、その上に新たにオリパラ教育を推進したことで、より一層人権意識が高揚したと考えられる。

7 実践において工夫した点（特色）

- 「総合的な学習の時間」の柱である人権学習の一環に位置づけた。
- パラスポーツ体験会を毎年行っている人権集会と兼ねて行った。
- パラスポーツ体験会を新入生中学校見学とも兼ねて行った。
- 1小1中による小規模校の強み（小回りの良さ）を生かした小中連携。

8 課題等

- 緊急事態宣言による休校が続き、当初の計画をほぼ変更した
- 保健体育科が中心となって計画したため、計画段階で他教科や分掌担当とあらかじめ連携を取っておく方がよかった。
- 緊急事態宣言による事業の中止に備えたバックアップの準備。
- コロナ対応による計画の適宜変更。

実践事例 7 高松市立屋島東小学校（香川県）

1 実践のテーマ

「福祉」と関連付けたオリ・パラ教育実践

2 対象者

第5学年 27名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：オンライン交流会、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

障がいのある人の日常に想像力を働かせ、パラリンピックスポーツの体験を通して具体的な課題を体感したり、生活場面でのバリアを探し出して解決の手立てを考えたりするなど、パラリンピックを切り口として、共生社会の実現につながる考え方を学ぶことができる。

5 取組内容

- オリンピック・パラリンピックについて調べて新聞にまとめる。
- I'm POSSIBLE の活用。
- パラリンピックスポーツを体験。
- プロのパラスポーツ選手とオンライン交流会。
- パラリンピックスポーツ体験会の開催。
- だんのうら学習発信・交流会。



6 成果

- オリンピックだけではなく、パラリンピックへの理解や関心が高まった。来年度開催される東京オリンピックやパラリンピックが楽しみだと答える児童が増えた。
- パラリンピックスポーツの特徴である、「道具の工夫」「ルールの工夫」「人のサポート」について、体験を通して学ぶことで、これからの共生社会を担っていく自分達ができることについて、新たな視点で考えるきっかけとなった。
- 体育では、これまで特別支援学級のクラスメイトだけ特別ルールとしていたが、自分達がその児童に合わせたルールでしたいといった様子も見られた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 「Zoom」を活用することで、移動や会場の準備等といった負担を減らして、コロナ禍でも安心して手軽に交流をすることができた。また、他校の児童と関わる取り組みはこれまで無かったので、今回3校で交流会を行った時間は、児童の価値観を広げるとても貴重な経験となった。
- パラリンピックスポーツ体験会では、1年生から地域の老人会まで、幅広い年齢の人と一緒に活動をするを通して、誰でも平等に競い合えるパラリンピックスポーツのよさを、改めて再確認することができた。

8 課題等

- 5年生は総合的な学習の時間のテーマである「福祉」に関連させて、年間を通してオリ・パラ教育の実践を行ってきたが、他学年での年間計画への位置づけが不十分である。
- オンライン交流会では、「ZOOM」の操作や使い方に不慣れな部分もあり、教師側がICTを上手に活用していく技能を学んでいかなければならないと感じた。

実践事例 8 熊本市立託麻東小学校（熊本県）

1 実践のテーマ

キャリア教育と関連付けたパラアスリートの講演会

2 対象者

第3学年 約190名、第4学年 約170名、第5学年 約170名、
第6学年 約154名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間、学級活動

4 目標（ねらい）

- キャリア教育の一環として、職業選択の幅を広げたり、自分の生き方を見つめなおしたりするきっかけとする。
- 視覚障がいをもっている選手の生き方に触れることで、障がいをもつ人への考え方を見つめなおすきっかけとする。また、自分にできることを考えるきっかけとする。

5 取組内容

「事前学習」

内容

- オリンピックやパラリンピックについて知る。
- ゴールボールについて知る。
- 小宮選手について知る。
- 自分がどんなことに興味を持っているか考える。

「小宮選手による講演」

内容

- 目を閉じて「音」の世界を体験
- 目を閉じてボールの位置を当てるクイズ

「事後学習」

内容

- 各クラスで振り返り、感想を記入。



6 成果

- オリンピックに限らず、パラリンピックへの興味・関心が向上した。
- パラリンピックでメダルを獲得した選手の話が直接聞くことができたこと、そんな選手も子どもの頃は自分たちと変わらない生活を送っていたことなどを知ること、自分の生き方を見つめなおすきっかけとなったと思う。
- 視覚障がいをもっている人の困っていることや助かることなどを本人から直接聞く体験を通して、障がいをもつ人への考え方や自分の関わり方を見つめなおすきっかけとなったと思う。

7 実践において工夫した点（特色）

コロナ対策として Zoom を利用した。

8 課題等

特になし。

実践事例 9 いちき串木野市立市来小学校（鹿児島県）

1 実践のテーマ

パラアスリートの講演会及び実技体験を通じた障がい者理解

2 対象者

第4学年 55名、第5学年 54名、第6学年 55名、教職員 6名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- オリンピック・パラリンピックへの理解を深め、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高める。
- パラリピアンによる講演や競技体験を通して、スポーツに対する興味・関心の向上を図るとともに、障がい者への理解を深め、オリンピック・パラリンピック競技に関する豊かな知識を育む。

5 取組内容

「オリンピック・パラリンピックについて学習しよう」

内容

- オリンピックについて知る。（オリンピックの価値）
- パラリンピックについて知る。（パラリンピックの価値）
- ピクトグラムについて知る。（ピクトグラムクイズ）
- オリパラ競技について調べる。（「TOKYO2020」のサイト「One Minute, One Sport」の視聴）
- オリパラ教育の大切さを考える。
- ICHIKI フェアプレー宣言について知る。

「パラリピアン講演会」

内容

- パラリピアン講演会（講師 安達阿記子 ・ 競技 ゴールボール）
- ロンドンパラリンピック金メダリスト



6 成果

- ピクトグラムを使った設営やクイズにより、オリンピックやパラリンピックの競技に親しみをもたせ、競技の種類や内容に対する知識・理解を深めさせることができた。
- 授業を通して、児童はパラリンピックのことについてほとんど知識がないことが分かった。そのため、動画視聴やパラアスリートの講演会により、パラリンピックが身近なものとなり、障がい者理解につなげることができた。
- オリンピック・パラリンピックを応援したいという態度の育成に繋がった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 児童が普段からオリパラ教育を身近なものとして考えられるように、児童玄関前にオリパラコーナーを設置した。
- 「ICHIKI フェアプレー宣言」を各学級に配布したり、体育館に掲示したりして、これからの学習活動とオリパラ教育が関連付けられるようにした。

8 課題等

- 低学年の発達の段階に応じたオリパラ教育についての手立てを充実させる。
- 児童の興味・関心を高めるための環境整備を工夫する。
- 児童の知識・理解を深めるためのカリキュラム・マネジメントについて検討し、開催時期に深い学びができるように工夫する。
- オリンピック・パラリンピックの競技体験を通して、スポーツの楽しさの多様性にて学ぶ機会をつくる。

実践事例 10 千葉市立若松小学校（千葉市）

1 実践のテーマ

パラリンピック博士になろう！

2 対象者

第5学年 130名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

パラリンピックやパラスポーツに対する興味や関心を高め、身近に感じられるようにする。パラスポーツの体験やパラスポーツについて調べる活動を通して、共生社会の実現を考えることができるようにする。

5 取組内容

- (1) パラスポーツについて知ろう！（総合的な学習の時間）

I'mPOSSIBLEの資料映像を活用し、パラリンピックの概要を知る。

- (2) パラリンピアンについて知ろう！（総合的な学習の時間）

①車いすバスケットボール 香西選手

香西選手は若松小学校出身で、3年前に本校に講演に来ている。その時の印象を思い出して話し合う。I'mPOSSIBLEの資料映像（香西選手ってどんな人だろう／勉強もバスケットも頑張ったことが誇り）を活用し、努力や苦勞を知る。

②世界のパラリンピアンについて知ろう！

I'mPOSSIBLEの資料映像（タチアナ・マクファデン選手／リカルド・アウヴェス選手）を活用し、努力や苦勞を知る。

- (3) パラリンピック競技に挑戦しよう！

（体育科）

①車いすバスケットボール（3時間）

通常の車いすとの違いを見付ける。





②シッティングバレーボール（3 時間）

○シッティングバレーボールについて知る。

パラスポの魅力伝え隊の動画を見て、シッティングバレーボールの行い方や千葉市で競技が行われることを知る。

○シッティングバレーボールをやってみよう！

自分の選んだパラスポーツについて調べよう。（総合的な学習の時間）

(4) 若松パラリンピックを開催しよう！（総合的な学習の時間）

ボッチャ、ゴールボール

6 成果

- 実際にパラスポーツを経験したり調べたりすることで、児童にとってパラスポーツが身近なものとなり、関心が高まった。
- パラスポーツを経験する中で、パラスポーツは障害の有無にかかわらず楽しめるということに気付くことができた。
- パラリンピアンへの努力や苦労について知り、どんなことがあっても諦めずに努力することの大切さを感じることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

- I'mPOSSIBLE の資料映像、パラスポの魅力伝え隊の動画を活用し、パラスポーツに対する理解や関心を高めた。
- 競技用車いす、ゴールボール、ボッチャセットなどの実物を活用し、体験を通して学ぶことができるようにした。
- 学習のまとめとして若松パラリンピックを開催し、体験したことや調べたことを生かす場を設定した。

8 課題等

パラスポーツの経験を多く取り入れたので、指導時数が多くなった。体験する競技を絞ってもよいかもしれない。第5学年だけで経験しようとする、時数の確保が難しい。第3、4学年から年間計画に位置付けて、少しずつ経験させていきたい。

実践事例 11 浜松市立都田南小学校（浜松市）

1 実践のテーマ

ホストタウンのアスリートとのオンライン交流等を通じた共生社会についての学習

2 対象者

第1・2学年 132名、第3・4学年 124名、第5・6学年 142名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

4 目標（ねらい）

スポーツを通じて、国際理解や共生社会の理解を学ぶとともに、夢をもち、それを実現していく生き方を考えていく。

5 取組内容

内容

○パラリンピック種目体験

ボッチャ日本代表チームのコーチ3名を招き、ボッチャを体験した。

○元プロバスケットボール選手との交流

大口真洋氏を講師に招き、講話を聞いた。また、シュートやパスなどのバスケットボールを使ったゲームをして、触れ合った。

○ブラジルパラリンピック選手との交流

事前に、放送や掲示等でブラジルの国の文化や言葉の紹介や、ブラインドサッカー、交流する選手の紹介について学習した。



6 成果

ねらいとする、「スポーツを通じて、国際理解や共生社会の理解を学ぶとともに、夢をもち、それを実現していく生き方を考えていく」ことや、学校教育目標「進んで考え、共に学び 未来を拓く 都南っ子」につながる実践となった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 令和元年度から、オリパラ教育を推進していることを生かして、継続して、オリパラ教育について発信した。
- 特別支援学校との交流をしており、並行して実践を行った。

8 課題等

- 外部団体との交流になるので、それをつないでくださる、大学や市との連携が欠かせない。
- 各クラス、オンラインでつなぐため、事前の研修が大切になる。そして、各教室の ICT 環境の整備が急務である。

実践事例 12 京都市立七条中学校（京都市）

1 実践のテーマ

横断的なオリパラ教育の取組

2 対象者

第1学年 158名、第2学年 137名、第3学年 136名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

その他：総合的な学習の時間、特別活動



4 目標（ねらい）

- ①保健体育科 ②総合的な学習の時間 ③特別活動
- オリンピック・パラリンピックを通して、スポーツを「する・見る・知る・支える」ことについて理解する。→ ①
- 「共生」について探究する力を身に付ける。→ ①②③
- SDGsの学びとつなげ、実際に生きて働く力にする。→ ②
- 「他者理解」を深め、インクルーシブな社会につながる意識を構築する。
→ ①②③

5 取組内容

【今年度外部資源及び取組】

- 4月 読売新聞 SDGs ワークシート（興味付けの休校期間の課題）
- 5月 EduTownSDGs ワークシート（休校期間の課題とオリエンテーション）
- 6月 国連広報センター Go ゴールズ SDGs すごろく（事前学習 班で対戦）
- 7月 オリンピック・パラリンピック調べ学習（第1学年保健体育科 休校期間からの課題）
- 8月 SDGs 調べ学習 夏季休業中課題
- 9月 パナソニック キッド・ウィットネス・ニュース（以下、KWN）ワークショップ（映像制作ワークショップ Zoom）
オリンピック・パラリンピック調べ学習
（第1学年 ポスターセッションと事後レポート）

- 10月 パラリンピックサポートセンター あすチャレ！スクール（体験型講演）
朝日新聞 SDGs169 ターゲットキャッチコピー作り
（学年掲示物）＋ 地域商店街キャッチコピーづくり
「聲の形」視聴（第1学年「共生」について対話）
- 11月 パラリンピックサポートセンター あすチャレ！アカデミー（ワークショップ）
人権学習「共生」をテーマに対話
映像制作1 パナソニックワークショップ課題
オリンピック・パラリンピック調べ学習
（第3学年 ポスターセッションと事後レポート）
- 12月 映像制作2 パナソニック KWN SDGs「今、伝えたいこと」5分間映像
コンテスト
あすチャレ宣言！送付
- 1月 パラリンピック応援フラッグ完成
- 2月 SDGs アイデアを形にしよう Go Green プロジェクト参加
性に関する学習（「共生」対話）
オリンピック・パラリンピック調べ学習
（第2学年 ポスターセッションと事後レポート）
- 3月 キャリアパスポート 自己のふりかえり

6 成果

- スポーツを「する」以外の「知る・見る・支える」についての意識が高まり、自分の関わり方を考え行動できるようになった。
- 年間を通じての学びが、これらの取り組みで繋がり、生徒と指導者共に、横断的な視点をもつことができた。
- 「共生」やSDGsをテーマに対話を繰り返し行い、合わせて発表や応募をきっかけに、協働的な活動が生まれ、これまでの学びを活用することができた。
- 指導者の関わりが、指導からファシリテーターへと変容しつつあり、生徒の主体的な活動を引き出すことにつながった。
- パラリンピアンとの関わり（講演・ワークショップ）から、他者理解の意識だけでなく、自分事にする意識も高まった。
- まとめレポートからは、「パラリンピックに対する興味が高まった」ことや、「自分が何か関わることではないか」といった意識、「障がいのある方との関わりをきっかけに、共生について考えることができた」など自分の内面の動きを表す内容が伺えた。



7

実践において工夫した点（特色）

- ①子どもと関わる３年間の学年経営をカリキュラムデザインするにあたり、「子どもの学びと教員同士のつながり」を生み出すものを軸にすること。
- ②SDGsを活用するために、総合的な学習の時間と特別活動を軸にし教科横断的視点と、縦断的視点を描けるようにしたこと。
- ③オリンピック・パラリンピック教育を単発のイベントにするのではなく、①②を実践するための方法として活用すること。
- ④前年度までの「文科省 教科等の本質を踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」の基盤を活かし、新学習指導要領の内容の実践につながるものにすること。

8

課題等

- ①子どもと関わる３年間のカリキュラムデザインをまず始めに考える必要がある。そこから、いつ、どんなことを取り組むかを決める必要がある。何をするかから始めると、取り組みを行うことが目的になってしまう。手段が目的化しないために、何を目的にどの取組を組み入れるかを精選する必要がある。
- ②ゼロベースから行くと、時間と労力が過剰になるため、外部資源の積極的な活用が必要。ただし外部資源を取り入れる視点を市内に限定せず、市外や全国・世界などに広げ、講演やワークショップもオンライン活用を併用する視点が必要。
- ③①②共にカリキュラムデザインやSDGs、これからの学びについて理解できているかどうか重要である。取り組みの成果物などの見えることだけでなく、対話や実践中の経過など見えないことをどのように評価し改善するのかという視点で、学びをつなげ続ける必要がある。
- ④評価のためにポスターセッションなどの方法（や成果物）をゴールとするのではなく、それらを通して何を学んだのか振り返り、更に新しい問いを生み出し次の学びに活用する必要がある。③と重なるが、指導者側が「目標と指導と評価の一体化」の意識を高め、手段が目的化しないようにすることも課題である。

M E M O

実践事例 1 滝川市立江部乙小学校（北海道）

1 実践のテーマ

オンラインを活用したホストタウン交流とパラスポーツ体験

2 対象者

第5学年 16名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

その他：総合的な学習の時間、道徳

4 目標（ねらい）

- 豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を高めるとともに、パラスポーツの体験を通して共生社会への理解を深め、自己の生き方について考えを深める。
- パラリンピアンについて、主体的・協働的に探究的な学習に取り組み、世界の文化や価値観の理解を深める。

5 取組内容

【体育科における取組】

- オリンピック・パラリンピックの精神や歴史を学ぶとともに、競技要素を取り入れた体験を通して、スポーツの意義や価値について理解を深めた。

【道徳科における取組】

- 「希望と勇気」「思いやり」等のオリンピックやパラリンピアンの生き方について学び、道徳的価値について理解を深め、自己の生き方について考える。
- 滝川市はアルゼンチンのホストタウンであることを知り、交流活動を通じて、国際親善に努めようとする態度を養う。

【総合的な学習の時間における取組】

- 滝川市役所、アルゼンチン大使館、アルゼンチン及び江部乙小学校をテレビ会議システムでつなぎ、アルゼンチンパラカヌー代表選手と交流し、パラスポーツの精神や共生社会について理解を深める。



6 成果

- アルゼンチン代表選手と会話に向け、ゲストティーチャーを招いてスペイン語の学習を行い、テレビ会議システムを活用しての交流では、児童がスペイン語で質問をすることで、他国の文化をより身近に感じることができた。
- 体験を通じてパラスポーツは、一人一人の身体の状態に合わせてルールや道具を工夫して、みんなが平等にできるようにしていることについて理解を深めるとともに、共生社会をつくっていくために自分たちにできることを考えるきっかけとなった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 滝川市がアルゼンチンのホストタウンであったため、市とアルゼンチンがテレビ会議システムを活用して交流する機会に、児童も一緒に参加し、交流を深める場面を位置付けた。
- 北海道教育大学岩見沢校と連携し、毎年第5学年が総合的な学習の時間において、パラスポーツについての体験活動を実施している。
- プレイルームを活用し、オリンピック・パラリンピックの記事を掲示したり、学習の足跡を掲示したりするなど、学習環境を整備した。

8 課題等

今年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、ブラインドサッカー、スポーツ吹き矢が実施できなかった。今後は、密にならないよう配慮し、より多くの体験活動ができるよう、学習内容を工夫する必要がある。



実践事例 2 浦安市立見明川小学校（千葉県）

1 実践のテーマ

「Australian Olympic Connect ともだち 2020」 オーストラリアと日本の子どもたちの教育交流プログラム

2 対象者

第5学年 91名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- 異文化への理解の促進を図る。
- コミュニケーション能力の向上を図る。

5 取組内容

【オーストラリアの学校とのオンライン交流】

浦安市は、在日オーストラリア大使館が進める日豪スポーツ外交キャンペーンの参画団体「フレンズオブオーストラリア」(FOA) に認定されている関係から、浦安市 2020 オリンピック・パラリンピック推進課の協力を得て本プログラムを実施した。

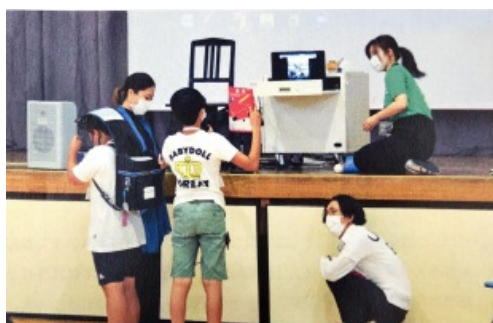
期間：8月末から12月初めの約3ヶ月間

オーストラリア交流校：ゴーリー小学校 (Gowrie Primary School)

オーストラリア参加者：第5・6学年のジャパニーズクラス 24名

交流内容：自己紹介、日本の文化紹介、学校紹介、計算ゲーム、日本についてのクイズ、あっち向いてほい、オリンピック・パラリンピックジェスチャーゲーム、間違い探しゲーム、日本の歌紹介 など





- 本校児童とゴーリー小学校の児童の積極的な取組で、毎回の交流は大いに盛り上がった。普段の英語の授業で学んだ会話を活用して児童自らが主体的にマイクに向かって話ができたととても良かった。
- ゴーリー小学校の児童が「ランドセルの中身はノートの他に何が入っているの?」という質問をした時に、「他には愛、夢、希望が詰まっています。」とユーモアのある答えが出た。
- 交流した児童より、「林間学校（宿泊）が無くなってがっかりしていたが、それ以上にオーストラリアの人たちとの交流が楽しく、興味が湧いた。」「別の国の人とゲームをすることができるとは思わなかった。楽しかった。」という好意的な感想が聞かれた。

6 成果

- 日本とは異なる文化や民族の中でも、特に同年代と交流することにより自分たちとの「違い」を知ることができた。同時に、共通する価値観を見出し、相手国の文化の素晴らしさを認めるという気持ちを育てることができた。
- 国際的な視野を持つことの大切さを学ぶことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

児童同士の交流は初めてであったが、実行委員会（クラスの児童2人選出）を構成して交流に臨んだことで、児童ならではのアイデアも多く出て、色々な企画をオーストラリアの児童と共に行うことができた。

8 課題等

- 日本とオーストラリアで学校の休日に違いがあり、約3ヶ月間の交流の中で実際に交流できた回数は8回であった。もう少し回数を増やすことができれば良かった。
- 時差は1時間のため相手校とのやりくりでなんとか開始時間を合わせることができたが、サマータイムに対する認識が甘く、交流時間を逸脱して1回交流できないことがあった。
- 機材と通訳を浦安市2020東京オリンピック・パラリンピック推進課より準備していただいたが、パソコンだけでの交流は厳しく、マイクやプロジェクター等の機材が必要であった。

実践事例 3 秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学・高等学校（千葉県）

1 実践のテーマ

伝統・文化を通じた自国と他国の理解

2 対象者

中学校 全校生徒 90 名

高等学校 全校生徒 1,138 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：地歴、芸術（書道）

その他：総合的な学習の時間、総合的な探究の時間

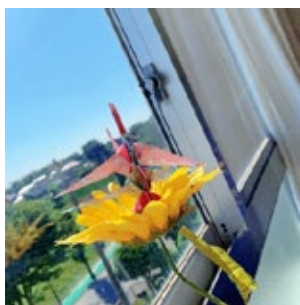
4 目標（ねらい）

オリンピック開催国のホストとして、自国の文化について理解を深めるとともに異文化に関心を持つ。また、2021 年の開催は、新型コロナウイルスの感染拡大防止、抑え込みが前提となる。それには日本が一丸となり、更にグローバルな取り組みが欠かせない。その必要性を踏まえて、他国を正確に認識する。同時に来日した外国人に発信できる日本の伝統・文化について、改めて学び直す。

5 取組内容

①「千羽鶴作成による新しい日常への意識向上」

- 地球規模で猛威を振るう新型コロナウイルスと戦う決意を固めると同時に、新型コロナウイルスと戦う人々へエールを送ることを目的に、1 人 3 羽の折り鶴を作成した。
- 完成した鶴の写真を撮影し、生徒全員にアカウントを配付した Google for Education の Gmail で集約した。
- Google フォームを利用して、自分の思いを文字にした。SNS を使うイメージで「# (ハッシュタグ)」を利用し、「# 今やりたいこと」「# 今できること」「# 感謝の気持ち」「# 目標」の 4 つから、鶴に込めた思いを書き込む。
- 生徒が撮影した鶴の写真と Google フォームに書き込んだ思いを 1 つにまとめ作品にし、校内に掲示した。



②「料理を通して世界を感じよう」

- 高校第1学年全生徒を対象に、夏季長期休暇の課題として各国の料理をテーマに探究活動を実施した。
- 探究する対象として選択した国について、オリンピック・パラリンピックとの関連を調べ、オリンピック・パラリンピック出場国への理解と関心を高めることを目指す。

夏期課題 2020	料理を通して世界を感じよう
料理名: パエリア スペイン(バルセロナ)の料理	
【料理の国・地域とオリンピックとの関係】(関係地・有名な選手・過去のオリンピック種目など) スペインのバルセロナは1992年の夏季オリンピックの開催地。 サッカーのスペイン代表として活躍し、今は日本のワラアの ヴァセリル神戸でプレーしているイニエスタ選手が有名。 また、サッカーやバスケットボールが盛んに行われていて 東京オリンピックではメダルが期待されている。	
【どんな料理?】(使われている食材、その土地の気候・自然・歴史・人物との関わり) パエリアはパエリア工、鶏肉、貝、米などが使われている スペインの伝統的な料理。 本所で有名なスペイン東部のパエリアでは、夏の休みの日 曜日はお母さんを休ませるためにお父さんが料理をこころ 由家。 スペインの東部は地中海性気候で農業が盛んなことから、農産物 でも振る舞われている。	
【料理の写真/食材の写真/イラスト】  【感想】 (実際に食材を買い、作り、食べて感じたこと、探究活動を通して新しく知ったこと・気づいたこと、オリンピックに向けて思ったこと) 今まで何回かパエリアを食べたことがあったけど自分で作るの 何とも思いがたかでした。 まずは、下に敷いてあるサフランの匂いとパエリアの苦味し エビや貝などのシーフードの甘味が印象に残っていて日本では 食べられないような味でした。 作る前は美味しいイメージがあったけど、炊飯器で作れる粉ずきも 売っていて想像以上に簡単に作れました。 パエリアでは、日本の料理ではなく、様々な国の料理が交流し 合っている感じがしました。	
高校1年	組 学級 番号 名前

③「漢字・書道を通して世界の国々を知る」

- 高校第1学年の書道選択者および書道部員に、世界の国名を漢字で書かせた。
- 作品は校内に掲示した。掲示から一ヶ月後、解答(読み方)を上書きし、再掲した。
- 難読の漢字から内容に興味を持たせ、その国自体に注目させる。掲示の中には読み方のヒントや国の情報を盛り込み、東京2020大会への期待を抱かせるようにした。



6 成果

①「千羽鶴作成による新しい日常への意識向上」

- 医療従事者の方への感謝の他に、休校期間中に支えてくれた家族への感謝の言葉も見られた。また、今自分にできる新型コロナウイルスへの対策についての記述も多く、生徒自身が新型コロナウイルスについてしっかりと考えていることが分かった。
- 学校生活だけでは見られない生徒の自由な思いや考え、表現力を見ることができた。

②「料理を通して世界を感じよう」

- 自身の関心を持つ国とオリンピック・パラリンピックの関係を知るきっかけとなった。日本の料理では、三平汁や信州そばなど郷土料理を選択する者が多く、ホスト国として自国の文化を知る点でも意義があったといえる。
- スウェーデン料理（ヤンソンの誘惑）やルーマニア料理（サルマーレ）など、料理自体がユニークなものもあり、オリンピック・パラリンピックという一面だけでなく、各国の文化に触れることができた。
- 東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けた感想も多く、料理を通じてオリンピック・パラリンピックへの関心を高めることができた。

③「漢字・書道を通して世界の国々を知る」

- 今までのオリンピック・パラリンピック教育の効果もあり、掲示して間もなく生徒が興味を示した。最初は解答を書かずに掲示したため、自ら調べたり、友人と「その国のヒント」を見て考えたりなど、主体的に活動する機会を持たせることができた。
- 生徒にとっても身近な自国の文化である「書」、「漢字」を用いて他国を表現することにより日本文化のすばらしさを再確認することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

①「千羽鶴作成による新しい日常への意識向上」

- 世界の国旗模様と和柄（日本）の折り紙を用いて鶴を折ることにより、日本も世界も新型コロナウイルスと戦っていること、医療従事者や生活を支えてくれる職種の人達の活動に思いを巡らせられるようにした。また、願いや思いを形にすることが千羽鶴や折り鶴であり、日本の伝統文化に肌で触れる機会を作った。

- 紙に書かせるよりも気軽に取り組めるであろうと考え、モバイル機器を活用して思いを言葉にさせた。学校生活のことやプライベートでの楽しみなことなど出来る限り自由な思いを書かせるようにした。
- ②「料理を通して世界を感じよう」
 - 新型コロナウイルスの流行を受け、講演会や交流行事が開催困難となった社会情勢において、密を避けた実現可能な「体験」として「世界の文化に“舌”で触れよう」というコンセプトにした。
 - 開催国のみでは地域が限られるため、有名な選手や興味のある競技など、選ぶ国の対象を広げた。
- ③「漢字・書道を通して世界の国々を知る」
 - オリンピック・パラリンピックへの関心を持たせるために、みんなで楽しめるクイズ方式で作品を仕上げた。
 - 作成している生徒自身も楽しく活動できるよう、オリンピックカラーの墨汁を使わせたり、筆を用いる際の基本点画にはこだわらず、自由に書かせたりした。

8

課題等

- ①「千羽鶴作成による新しい日常への意識向上」

多くの生徒が取り組んでくれたが、写真のみや Google フォームの回答だけの生徒もいたため、全員の作品を作ることができなかった。
- ②「料理を通して世界を感じよう」
 - 当初、課題の提出方法は接触を最小限にするためオンライン形式を検討していたが、各家庭の通信環境及び生徒の IT スキルの習熟度を勘案し、紙媒体で集めることになった。
 - 文化祭等の学校行事が軒並み中止となり、発表の機会（全生徒に共有する機会）が限られてしまった。
- ③「漢字・書道を通して世界の国々を知る」

校内掲示に目をとめることのなかった生徒もいたと考えられるため、地歴の授業で解答するなど、教科間で連携をして、少しでも多くの生徒を参加させる機会を作るべきであった。

実践事例 4 千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）

1 実践のテーマ

Web（Skype）を活用した交流学习

2 対象者

高等部 10 名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

自国や他国の歴史・伝統・文化について学び、理解を深めることで、様々な人や異文化との関わりを通して経験や思いを分かち合い、夢を持って楽しみながら生きる姿を目指す。

5 取組内容

【アートマイル国際共同学習プロジェクト】

兵庫県立赤穂特別支援学校と Web での交流を行った。

第 1 回：自己紹介

第 2 回：学校紹介、地域紹介、質問タイム

○兵庫県や千葉県の文化、名所等について手紙でやりとり

○相手校から聞いたことに興味を持ち、調べて実演をし、動画で送る（吉本新喜劇のネタをやってみる等）

○野球チームについての話等、手紙でやり取り

第 3・4 回：SDGs に関する学習発表

赤穂特別支援学校：ゆうめいな『赤穂の塩』の「塩」と「水」についてしらべました

桜が丘特別支援学校：ゴミの分別と地球温暖化について

まとめ：感じたことを絵で表現するほか、冊子にまとめる



6 成果

- 初めてのオンラインに戸惑い、最初は質問にうまく応えられなかった生徒もいたが、自分たちのことを紹介するには自分たちの住む千葉県についてもっと知らなくてはということに気づくことができた。
- わかりやすく伝えるためにはどうしたらよいかをみんなで考え、イラストを掲示したり、イメージしてもらいやすいような工夫を考えたりすることができた。
- 交流を進める中で、関東と関西で放送されている TV 番組が違うことを初めて知り、他にもっと違いがあるのか知りたいという意見がたくさん出て、自分から調べようという意欲につながった。違いについてパワーポイントを活用してまとめ、説明したり、TV 番組について方言を交えて演じてみたりして、文化の違いを知り受け入れたり、感じたことを交流相手に聞いたりすることができた。
- 他の学校の生徒に伝えることで、子どもたちの意識も変わり、質問に対して調べて応えたり、もっと知りたいという気持ちが強くなった。交流を積み重ねることで、実際に体験活動を行ったときと同様の効果が得られると感じた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 他校と交流することで自己を見つめ、自分たちの住む千葉県について多角的に説明しようとしたり、SDGs やオリパラ、その他の課題について興味・関心を持ち、自分から調べたり、相手に聞いてコミュニケーションを深めることにつながった。
- 両校で SDGs の課題で「私たちが今日からできること」を考えて意見交換をし、実行につなげられるように工夫した。

8 課題等

- Web を使った交流では、全体を通して日程調整の難しさがあった。また、30 分程度と時間を設定しても、質問が多く出て盛り上がり、時間を延長してしまうことも多かった。
- 回線が不安定で途中で途切れてしまうこともあったため、回線が安定し、Web カメラやマイクの使いやすさが進むとよりリモートでの学習がしやすくなると感じる。

実践事例 5 徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）

1 実践のテーマ

ホストタウンとのオンライン交流

2 対象者

第3学年 70名

3 展開の形式

【学校における活動】
その他：課題研究

4 目標（ねらい）

- 共生社会を理解し、主体的に行動できる人材を育成する
- ホストタウン国への理解を含め、異文化への理解を深める

5 取組内容

(1) ジョージアとの交流

徳島商業高校は徳島県のパラリンピックのホストタウンであるジョージアとの交流をスタートさせた。ホストタウン特使の私たちは、ジョージア車いすフェンシングの代表選手であるイルマ・ヘツルアニ選手やトビリシ自由大学の学生たちを紹介いただき、Zoomでオンライン交流を行った。イルマ選手は、ジョージアの車いすフェンシング代表チームにおける、初の女性選手である。彼女はジョージア国内で障害を持つ女性やスポーツ選手を支援する活動に携わり、ジョージアパラリンピック委員会で事務長として勤務している。Zoomでのオンライン交流では、映像作成のために私たちがイルマ選手へのインタビューを行ったほか、私たちから徳島県の魅力の紹介などを行った。今の目標を質問すると、「東京2020大会が開催され、そこで金メダルを取ることです。開催されることを期待しています。」と答えてくれた。そして、「応援してくれている人を愛しています。みんなの支援がとても大切です。」とのメッセージをいただいた。また、練習していたジョージアの国歌を披露するとイルマ選手、橋本大臣は大変感動され、橋本大臣から「アスリートは、表彰台で自国の国歌を聞くのが最大の目標の1つです。来年の大会ではイルマ選手が表彰台に立ち、皆さんと国歌斉唱できたらと思う。来年の大会を、新型コロナウイルスに打ち勝った証となる安全で安心な大会が出来るよう尽力したいです。」との言葉をいただいた。

トビリシ自由大学の学生とのZoomでのオンライン交流では、トビリシ自由大学の学生がジョージアについて私たちにプレゼンテーションを行っていた。

ただいた。ジョージアのオススの観光地、ジョージア料理や伝統的な文化などをプレゼンテーションしてくださり、とても興味を持った。これがきっかけとなり、ジョージア料理の研究もはじめた。プレゼンテーションからジョージアについて多くのことを学ぶことができ、とても貴重な経験となった。



(2) ジョージア国歌指導

イルマ選手や橋本大臣の「国歌は選手にとって特別である。」という言葉聞いて、国歌を「みんなで歌ってジョージアを応援しよう。」ということになった。そこで、様々な方に参加や参加団体の紹介をお願いしたところ、見能林小学校、藍住東中学校、池田支援学校美馬分校、徳島県未来創生文化部ダイバシティ推進課、徳島県未来創生文化部国際スポーツ局の方々にご協力いただけることになり、歌声と応援メッセージを撮影した。さらに自分たちの歌声も重ね応援映像を制作した。流れとしては、はじめに本校の音楽の先生と生徒が世界の国旗・国歌研究協会の先生からジョージアの歴史や国歌を教わった。その後に、各校へ楽譜や音源など必要なデータを送り、撮影当日に約1時間の指導（本校生徒が、各校の児童、生徒に対して）を行い撮影、そのデータを編集して映像を完成させた。



6 成果

生徒たちの実施感想文からは、「ホストタウン対象国を応援したい気持ちが出てきた。」や「共生社会に向けて、取り組めることから始めよう。」という内容が多く出てきた。年度当初、「ダイバシティ」や「共生社会」という言葉はほとんどの生徒が知らなかったが、取組を進めるにつれて自ら取り組みたいという生徒が増えた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 生徒が自ら取組を行うよう仕掛けをした。歌の映像作成においては、まずは自分たちが練習を行い、指導できるようになり実施することで自覚を持って活動できた。
- 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校と多くの学校と連携して行うことができた。

8 課題等

新型コロナウイルス感染症の影響や時差などがあるため、相手国の交流対象者との日程調整には気がついた。また、校種の違う学校との連携については、それぞれの授業の事情などもあるため、タイミングをどのように取るか、密にならないように実施するために必要な措置（広い部屋や体育館を利用するなど）をはかれるよう調整した。

MEMO

実践事例 6 静岡市立中藁科小学校（静岡市）

1 実践のテーマ

ホストタウンの食文化についての学習

2 対象者

第5学年 10名、第6学年 10名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：家庭科

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- 食文化を通じてスペインを理解する。
- 地元である「オクシズ」の食材を知り、改めてその良さを感じる。
- 地元の特産物である「お茶」を使ったスペイン料理のレシピ開発を通して、地域のよさを生かした世界とのつながり方を考える。

5 取組内容

「食文化を通じたスペイン理解」

内容

- スペインについて知っていることの共有
- スペインの食文化について（日本との共通点と相違点を考える）

「オクシズ食品紹介」

内容

- オクシズ紹介（それぞれの地域のよさや特徴を踏まえて）
- お茶の機能、食べ方の紹介

「地元産のお茶を使った「本山茶×ピンチョス」レシピの開発・調理」

内容

- 各グループでお茶のよさを生かしたピンチョスレシピの開発
- 完成したレシピの調理



6 成果

- 食文化の共通点や相違点を考えることを通して、遠く離れた国「スペイン」を身近に感じることができた。それと同時に、他の国の文化にも興味をもち、進んで調べようとする意欲が高まった。
- ヨーロッパでも、地元の特産物であるお茶のよさが広まりつつあることを知り、地元の魅力を改めて実感できた。さらに、ピンチョスとコラボレートさせることで、お茶のよさを世界に広めたいという思いをもった。
- 「本山茶×ピンチョス」のレシピ開発を通して発想力や創造力を高め、さらに、作り方のプレゼンテーション制作を通して表現力を高めることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

スペイン料理に取り入れる食材を、子どもたちが総合的な学習の時間等で学習を深めている地元の「お茶」にしたこと。

8 課題等

新型コロナウイルス感染症対策のため、調理実習の際に岡根谷さんに来ていただくことができなかった。実際に作ってみるとうまくいかない部分もあったので、リモートで具体的なアドバイスをもらえるようにすると、より効果的だった。

実践事例 1 七ヶ浜町立向洋中学校（宮城県）

1 実践のテーマ

校内体育祭における聖火リレーの実施

2 対象者

全校生徒 253 名、保護者 約 150 名

3 展開の形式

【学校における活動】

行事名：校内体育祭

その他：給食時における委員会活動および単学活

4 目標（ねらい）

○生徒たちの東京 2020 大会への興味・関心を高めるとともに、地元七ヶ浜の東京 2020 大会へ向けた気運を高め、明るく最後まで一所懸命競技する自分たちの姿を通しコロナ感染拡大で意気消沈している人たちに元気を与える。

○震災復興支援への感謝の気持ちと地元の復興を地域の方々と共有する。

5 取組内容

生徒たちの東京 2020 大会への興味・関心を高め、加えて地元七ヶ浜の東京 2020 大会へ向けた気運を高めるため、コロナ感染拡大で期日延期を受け、開催が危ぶまれた体育祭の開会式で聖火リレーを実施した。申請当初は、地元七ヶ浜町で実施が予定されていた本物の聖火リレーに合わせ、街頭に出て小旗を振りながらの全校応援を計画していたが、聖火リレーが新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となってしまった。そのため、東京 2020 大会へ向けて、今自分たちができることを考えさせたとき、自分たちの体育祭の中で聖火リレーをすることで、向洋中生はもちろん、地元七ヶ浜の人たちの東京 2020 大会へ向けた気運を高めることができるのではないかと考え、内容を変更して本事業に参加することとした。



聖火プロジェクト

(10月24日実施の体育祭開会式の中で、生徒たちによる聖火リレーを実施)

<開会式次第>

1. 選手入場
2. 開式宣言
3. 国旗、町旗、校旗掲揚
4. 聖火入場（聖火プロジェクト）
 - 1) ピロティー前の時計脇に聖火台設置
 - 2) 生徒入場後、1964年東京大会時のファンファーレ（吹奏楽部演奏）で聖火保持者入場
 - 3) 聖火は各部活動の代表者（計12名）でリレーし、聖火台に点火
 - 4) 進行生徒が聖火リレー実施までの経緯と東京2020大会についてアナウンス
 - 5) 聖火最終ランナーが聖火台まで走り聖火点火
 - 6) 聖火台に手作りの炎（布で作成）が灯る
 - 7) 点火と同時に、吹奏楽部員によるファンファーレ演奏後、花火打ち上げ
5. 選手宣誓



実行委員、放送委員会によるオリンピック・パラリンピック知識伝達プロジェクト
給食時の校内放送を通し、オリンピック・パラリンピックの歴史やオリンピック憲章、オリンピック精神等についての知識を伝達（9月～10月）

6 成果

- 聖火リレーの応援から始まった企画ではあったが、コロナ禍の影響で大きく方向転換することとなった。そのおかげで、東京2020大会に対する地域の気運を高めるため、自分たちができることは何かを真剣に考え、体育祭開会式での聖火リレーにこぎつけることができた。本物のトーチを用いての聖火リレーといったアイデアに、来校した多くの保護者は仕切り直しの東京2020大会開催を改めて強く意識する様子が見られた。また、コロナ禍の中での聖火リレーを取り入れた体育祭の実施ということで地元新聞の取材を受けるなど、多くの話題性を地元に掲げかけることができた。
- 1週間にわたるオリンピック関係の校内放送のおかげで、放送原稿を作成した実行委員の生徒たちはもちろんそれを聞いた生徒たちにおいても、オリンピック・パラリンピックに対する関心を高めることができた。

○震災後約10年が経過する区切りの時期に、コロナ対策に合わせ種目内容を自分たちで工夫して体育祭を実施した。その中で、スポーツマンシップに則り最後まであきらめず精一杯取り組む姿。勝敗にかかわらず競技終了後に相手をたたえる態度。そして何より競技を楽しむ自分たちの姿を通して、コロナ禍に苦しむ今の状況をみんなで乗り越えていこうとする勇気を全校生徒及び全教職員はもちろんのこと、来校いただいた多くの保護者と共有することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

コロナ禍におけるイベントの計画ということで、一度は計画した内容の変更を余儀なくされ、次に考えた体育祭の中での聖火プロジェクトにおいても、いつ体育祭が中止になるか予測がつかない中での準備及び運営となり、教員はもちろん生徒たちのモチベーションを維持していくのが大変難しい状況であった。そんな中、「自分たちも含め地域の人たちに何か明るい話題を提供し、みんなで楽しみ、みんなで笑顔になろう」を合言葉に、結果よりも準備する段階を楽しんでいこうと話しながら、生徒たちと進めてきた過程が、今考えてみると教師にとっても生徒にとっても良い結果につながったと感じる。

8 課題等

本事業の予算を執行するにあたり、必要な物品の購入や借用について、認められない場面が多々あり、そのたびに関係部署と協議したり指示を受けたりする必要に迫られた。関係部署との事前の確認が不十分だったことが、大きな反省点としてあげられる。

MEMO

実践事例 2 猪苗代町立翁島小学校（福島県）

1 実践のテーマ

東京 2020 大会出場を目指す地元ゆかりのアスリートへの応援ビデオ作成

2 対象者

全校児童 70 名

3 展開の形式

【学校における活動】

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

猪苗代町にゆかりのあるバドミントン選手の応援ビデオ作成やオリンピックの歴史学習をとおして、オリンピック・パラリンピックを応援する気持ちを高め、開催の意義を理解する。

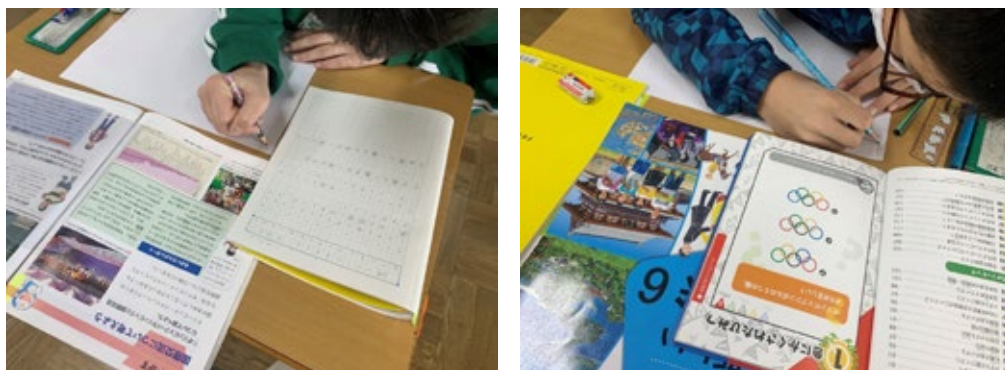
5 取組内容

【応援メッセージ動画撮影風景】



【応援メッセージ動画完成披露会】





6 成果

活動をととして、児童はオリンピック・パラリンピックをより身近に感じることができ、日本人だけでなく、世界の選手を応援しようとする気持ちが高まった。また、応援メッセージ動画を送った選手本人からの御礼ビデオが届き、自分たちの気持ちが相手に伝わったことを実感することができた。さらには、歴史学習を行った6年生は、オリンピック・パラリンピックの開催の意義を深く捉えることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

東日本大震災により、猪苗代町に避難しオリンピック代表となったバドミントン選手を全校生で応援するメッセージ動画を作成した。また、来賓を招き、完成した動画を全校生で鑑賞した。6年生の歴史学習において、学習内容を広げ、オリンピック・パラリンピックの歴史や開催都市についても学習を行った。

8 課題等

学校だけでは、ビデオ撮影の業者選定や手配が難しいので、町教育委員会との連携が重要である。

実践事例 3 埼玉県立羽生第一高等学校（埼玉県）

1 実践のテーマ

キャリア教育と関連付けたアスリートのオンライン講演会

2 対象者

全校生徒 579 名

3 展開の形式

【学校における活動】

行事名：トップアスリート講演会

4 目標（ねらい）

- オリンピックの講演会を通じて、アスリートの生き方やスポーツに関する様々なキャリアを学ぶ
- トップアスリートを身近に感じ、生徒自らがチャレンジするきっかけを作る。

5 取組内容

千葉 真子 氏の講演（リモートによる講演）

- 講演「命を輝かす人間」
- 生徒代表お礼の言葉
- 記念写真撮影



6 成果

- 国際舞台を経験しているオリンピックから「目標に向かって一日一日を大切に。あとに悔いを残さないように頑張してほしい」とエールの言葉をもらい、生徒たちの心に響いた。自分も目標や夢に向かって努力しようというやる気につながった。

- 困難を乗り越えて、目標を達成することの大切さ、素晴らしさを再確認することができた。
- トップアスリートの生の声を聞いて、トップアスリートでしか感じられない感覚を聞くことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンラインで講演会を実施した。
- 事前に質問は講演者に送付しておき、講演の中で回答に触れてもらうようにした。
- 記念写真（生徒会本部役員・陸上競技部員）を撮影した。

8 課題等

- Chrome book とプロジェクタを用いて各教室で全校生徒が視聴する形式としたが、Zoom での実施ということで一部うまくつながらなかったりする場面があった。
- 費用の範囲内で講演をしてくれる人選が課題である。

実践事例 4 千葉県立東金特別支援学校（千葉県）

1 実践のテーマ

オンラインを活用したスポーツ交流

2 対象者

全校児童生徒 147 名

3 展開の形式

【学校における活動】

行事名：交流および共同学習、駅伝大会

【地域における活動】

イベント名：「オリ・パラ」サマーセッション in 東金
ーオンラインボッチャ選手権ー

4 目標（ねらい）

- ボランティア精神と温かいおもてなしの気持ちを育てる。
- 共生社会の形成を目指し、他者を理解しようとする気持ちを育てる。
- 生涯を通じてスポーツに親しみ、スポーツの楽しさや感動を分かち合う気持ちを育てる。
- 自国と他国の関係に目を向けて、自国の歴史や伝統文化について理解を深め、他国の歴史や文化、言語について学ぼうとする気持ちを育てる。

5 取組内容

【「オリ・パラ」サマーセッション in 東金ーオンラインボッチャ選手権ー】

今回で3回目となる本イベントでは、コロナ禍でもできる形として密を避けてできるよう、オンライン上（web 会議システムを活用）でボッチャ大会を展開した。オンラインで取り組めるようボッチャのルールをオリジナル化し、本校の「オリ・パラ」推進隊が審判を務め、試合を進めた。

参加者：30 チーム（地域の小学生から高齢者、障がいのある方等、約 150 名）

ゲスト：秋元妙美さん（ロンドン2012 パラリンピック ボッチャ日本代表）

優勝チームとのエキシビジョンマッチ、講演「ボッチャで知るパラリンピック」



【東上総地区特別支援学校リモート駅伝大会】

千葉県特別支援学校駅伝大会が新型コロナウイルスの影響で中止となり、対外試合を違う形で取り組めるよう、東上総地区3校（東金・長生・夷隅）でリモート駅伝大会を実施した。会場および距離、区間については各学校が準備し、同時刻でスタートし、実施した。

ゲスト：今井正人選手（トヨタ自動車九州）

大会中の解説、生徒への応援、閉会式での表彰や講演



【城西国際大学とのリモート国際交流】

毎年本校では、城西国際大学の留学生とボッチャを通して国際交流を図っている。新型コロナウイルスの影響もあり、リモートでボッチャをオリジナルルールにして交流を図った。留学生も新型コロナウイルスの影響のため参加できなかったが、大学の海外講師の方々が対応してくれ、韓国語、ハンガリー語などでやり取りをしてボッチャを通して交流を図ることができた。



【「オリ・パラ」サマーセッション in 東金ーオンラインボッチャ選手権ー】

地域の小学生から高齢者、障がいのある方等、多様な方（30チーム、約150名）が参加した。参加者はボッチャの魅力について知ることができ、また、アンケートから「パラリンピックへの意識が変わった」「障がい者スポーツの興味・関心が高まった」等、参加者の“気づき”や発見につながった。

【東上総地区特別支援学校リモート駅伝大会】

コロナ禍において密を避けながらの対外試合を行うことができた。生徒たちは実際に見えない相手を意識して走ったが、リモート越しにスクリーンに映った相手校のチームを意識して競争原理が働き、意欲的に駅伝大会に取り組んでいた。

【城西国際大学とのリモート国際交流】

実際に出身母国語を話す海外出身大学講師とリモート越しになることで、自分たちが用意した挨拶（相手の言語）を意欲的に話す児童生徒が多く見られた。また、ボッチャを通して交流を深めたことで、自然と緊張がほぐれ、リモートという垣根を越えて一体感が生まれ、心の距離も近づき、外国語への興味・関心が高まった。

【「オリ・パラ」サマーセッション in 東金ーオンラインボッチャ選手権ー】

オンラインによる取り組みとなるため、ボッチャのルールを簡易的にした。3m先にフープを置き、そこにボッチャのボールが何個入ったか、オンライン上でわかりやすく競うことができるように工夫した。ボッチャは不特定多数で触るため、投げる前は必ず手指消毒を行うこともルール化して安全・安心に取り組めるようにした。

【東上総地区特別支援学校リモート駅伝大会】

リモート越しに駅伝大会を行うことで相手校を意識して走ることができたが、それだけだと視覚的な情報で伝わりにくい部分もある。そこで、各校の細かな状況を参加校で共有しながら大会運営するため、web会議システムのスピーカービューを活用して各校が実況を行った。他校に実況が響き、視覚的な情報以外の情報も共有して運営した。また、ゲストの今井正人選手との解説のやり取りも入れ、走っている選手、これから走る選手等に適宜アドバイスをして駅伝大会を運営した。

【城西国際大学とのリモート国際交流】

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、従来の一斉での交流をリモートで実施した。「オリ・パラ」サマーセッションで実践したオンラインボッチャのルールを活用して取り組むことにより、違った形でお互いボッチャに親しみ、それと同時に心の距離も近づいた。

新型コロナウイルスの対策を講じつつ教育活動を展開していくことで、直接触れ合う体験的な活動が希薄になってしまった。この状況下でできる形としてリモートでの展開が多くなり、知的障がいの児童生徒にわかりやすく授業を進める際にはさらなる教材開発等が必要とされ则认为る。

実践事例 5 中能登町立鹿島小学校（石川県）

1 実践のテーマ

陸上競技の記録を題材にした算数科の学習

2 対象者

第6学年 73名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：算数

4 目標（ねらい）

陸上競技の記録（オリンピック・世界記録）を題材にした陸上選手の速さや歩幅、歩数を求める活動を通して、スポーツに対する興味・関心の向上を図る。

5 取組内容

○グループごとに与えられた課題を解き、交流し合う中で、自分と比べたり、アスリート（オリンピック）のすごさを感じ取ったりする。

課題：陸上選手の时速、100m 走るときの歩数、100m 走るときの1歩の歩幅、走り幅跳びの記録とスクールバスとの比較 等



○交流したことをまとめ、オリンピックロードに掲示し、全校児童に広める。



6 成果

- 算数で学習したことが、スポーツにおいても活用できることを実感し、スポーツについての新たな興味をもつことができた。
- オリンピックロードに1歩の歩幅や走り幅跳びの世界記録を実際に示したことで、アスリート（オリンピック）のすごさを体感することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

- 授業の導入で、アスリート（オリンピック）の動画などの映像資料や、本校第6学年の50m走・走り幅跳び・立ち幅跳びの記録を見せ、活動への意欲をもたせた。
- 算数での課題に合わせ、オリンピックの歴史や陸上の世界記録などを掲示したオリンピックロードを設置した。

8 課題等

今回は短距離に焦点をあてて行ったため、他種目・他競技への関心を高めるまでにはいかなかった。

実践事例 6 羽島市立竹鼻小学校（岐阜県）

1 実践のテーマ

ガイドランナー体験を通したパラスポーツについての学習

2 対象者

第5学年 128名、第6学年 124名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

視覚障がい者体験及びガイドランナー体験を通して、「する・見る・支える・知る」の観点からパラリンピックスポーツとの関わり方について考える。

5 取組内容

「障がい者体験会」

アイマスクを使って、視覚が失われた状態のまま、仲間の声や音を頼りに目的地まで移動する体験をする。

「I'm Possible を活用した、パラ陸上についての講義」

パラリンピックでの陸上競技はどのように行われているのかを紹介する。

「ガイドランナー体験」

ペアにアイマスクをしてもらい、視覚を失った状態をつくりガイドランナーを体験する。

「感想交流」

視覚を失った状態・ガイドランナーとして支えるときに感じたことの二点を交流した。



6 成果

- 児童が今まであまり身近になかったパラリンピックに関して興味関心を高めることができた。また、障がいを乗り越え、パラリンピックスポーツに挑戦する人の力強さに感動し尊敬の念を抱く児童が多くいた。
- 支える側の工夫や息を合わせるための練習の様子を想像し、ガイドランナーの素晴らしさに気づいた。

7 実践において工夫した点（特色）

事前に総合的な学習の時間で点字の読み方書き方を体験したり、身の回りにある視覚障がい者を支える福祉（点字ブロックや音声ガイドなど）について調べたりする学習を行った。

8 課題等

- ガイドランナーとして、支える側の言葉かけが難しいため、低学年には向いていない。
- 静かな環境でなければ、音が混ざってしまい支援できないため、場所や環境における配慮が必要。

実践事例 7 春日井市立知多中学校（愛知県）

1 実践のテーマ

オリパラを通したまちづくり

2 対象者

第1学年 170名

3 展開の形式

【学校における活動】

行事名：教育講演会、あすチャレ！ School

その他：総合的な学習の時間、学級活動

4 目標（ねらい）

オリンピック、パラリンピックを通してスポーツへの興味・関心を高めるとともに、パラスポーツを体験したり、パラリンピアンとの講話を聞いたりすることで、障がいのある方との共生について考えるきっかけとする。また、それらの視点で住むまち春日井を見て課題を見付け、解決の方法を考える「よりよいまちづくり」をしていく。

5 取組内容

【事前学習】春日井市の現状と課題を知る学習

近い将来人口が減少し、少子高齢化が進む春日井市が、どのような政策を行っているのかを知る（春日井市総合計画）。その政策分野の柱の1つに「市民活動・共生・文化・スポーツ」があることを知る。

- (1) 「I'mPOSSIBLE」を活用した学習（教材1－1・4・5）
 - オリンピック・パラリンピックの歴史や意義について
 - 公平性についての学習
 - パラリンピアンからバリアフリーを考える学習
- (2) パラスポーツ「ボッチャ」体験
- (3) 教育講演会1

地域の義肢装具製作所の方に、企業理念や、障がいの克服やパラスポーツの発展を支える義肢装具のこと、障がいのある方との共生にむけてまちに必要な取組を教えていただいた。

- (4) 「あすチャレ！ School」 講師：永尾嘉章氏

パラリンピックやパラスポーツの紹介、レース用車いすの体験、永尾氏が逆境をどのように乗り越えてきたのかという講話を通して、パラスポーツに

ついでに理解を深めるとともに、逆境に負けずあきらめないことの大切さを学んだ。

(5) 教育講演会 2 講師：江崎駿氏、江崎泰秀氏

地元出身で、東京パラリンピックにも出場が内定しているボッチャの江崎駿氏と、父でありボッチャコーチの江崎泰秀氏より、講話や体験を通してボッチャの魅力や楽しさを教えていただいた。また、私たちが障がいのある方とどう関わっていくとよいかを学んだ。



【事後学習】 よりよいまちづくり案を考える

「障がいのある方との共生」「外国籍の方との共生」「スポーツイベントを通したまちづくり」「パラスポーツの普及」という4つのテーマで班ごとにまちづくり案考えた。講話や学習の中で学んだことに、インターネット等で調べた先進的な取組を加え、どのような取組を行えばまちが活性化するのかをまとめ、発表した。

6 成果

- 「I'mPOSSIBLE」から各種講話まで、計画的に学習を進めることができた。体験やアスリートらによる講話では、いきいきと学びに向かう生徒の姿が見られた。
- ボッチャについては、体験を行うごとに楽しさが分かり、生徒らにとって身近なスポーツになった。12月に行われた学年レクでもボッチャが種目に選ばれるなど、浸透してきている。
- パラスポーツの一覧を掲示したところ「ボッチャ以外のパラスポーツも体験してみたい」という意見が生徒から出るようになった。
- 2021年に延期になった東京オリンピック・パラリンピックのことや、愛知県で2026年に行われるアジア競技大会のことなど、スポーツイベントのことが話題にあがる機会が増えた。

7 実践において工夫した点（特色）

- オリンピック・パラリンピックをどこか遠くで起こることではなく自分事として捉えるため、どのように身近な問題と絡めていくのかを考えた。世界規模のイベントとしての大きな問題として捉える部分とは別に、地元の企業やアスリートに御協力いただくことで春日井市にも関連する問題として捉える部分を設定できた。
- 本物に触れることでより学習が深まると考え、あすチャレ！ School や講話会

などの機会、実際に体験する機会を多く設定することができた。

8

課題等

- 学びの方向性に合致した講師の確保が難しい。
- 今年度は延期された東京オリンピックという、間近に迫った関心事があったため、生徒も意欲的に学習に取り組むことができた。来年度以降、学習の導入部分として何を用いるとよいか、考えていく必要がある。
- 8月～12月という長い期間1つのテーマで学習が行えたのは、今年度コロナ感染症の関係で例年行っている学習が白紙になったことが大きい。例年行っている学習の中に、今年度のような取組をどのように当てはめていくのか、年間計画の段階でしっかり考えていけるとよい。

MEMO

テーマ

実践事例 8 滋賀県立愛知高等養護学校（滋賀県）

1 実践のテーマ

特別支援学校のスポーツ交流

2 対象者

全校生徒 43 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

その他：特別活動（行事）

4 目標（ねらい）

- 高等養護学校 3 校の交流を図る。
- スポーツを通じて、社会自立に必要なマナー、ルールを学ぶ機会とする。
- 学習の成果を発揮する場とし、学習意欲の高揚を図る。

5 取組内容

- 7 月・・・ルールの説明
キャッチボール
- 8 月・・・守備練習・打撃練習
- 9 月・・・守備練習・打撃練習・試合練習



- 9 月 25 日（金）・・・高等養護学校 3 校交流戦（甲南・長浜北星・愛知）
場所：長浜バイオ大学ドーム



6 成果

- 毎年9月に県内3校の高等養護学校交流戦で1年生は、キックベースボール、2・3年生は、ソフトボールを行っている。
- 本校では、高等養護学校交流戦に向けて保健体育の授業でキックベースボールやソフトボールに取り組んだ。2、3年生の生徒は、他校との交流試合で、力を発揮したいと思う気持ちを持って、意欲的に授業に取り組むことが出来た。
- 授業では、3年生を中心に生徒たち同士で話し合いをし、各ポジションを決めたり、打順を決めたりすることができた。
- 9月25日（金）の交流戦当日は、男女ともに勝つことはできなかったが、他校の生徒と交流するなかで、練習してきた成果を発揮することができた。

生徒の感想

- コロナでできるかどうかわからなかったが、3年生にとって最後の交流戦だったので、良い思い出になった。
- 普段は、あまり他校と交流することがないので、すごくよい交流戦だった。昨年よりもバットを振れた。今年は最後の試合で、3年も2年も仲良くできたので良かった。ボールがもうちょっと飛んでほしかった。
- 交流戦でみんなとの仲が深まってよかった。中学校までは、ソフトボールはやったこともなかったが、この3年間でソフトボールをやってみて、チームスポーツだと感じた。
- 自分が打った時に思ったよりも飛んだので、ビックリしたし、嬉しかった。
- 一試合目は負けたけど、二試合目は引き分けたので、嬉しかった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 本校生徒は、球技をすることに苦手意識を持つ生徒が多いために、毎年行っているソフトボールを体育で3年間通して取り組んでいる。また、学習の成果を発揮する場として交流戦を位置づけ取り組んだ。

8 課題等

- 他校との交流戦を行うことで、技術の向上において課題があることが見えてきた。来年度以降の体育の授業の計画において、技術の向上を意識した活動の充実を図りたい。

実践事例 9 福山市立加茂中学校（広島県）

1 実践のテーマ

パラアスリートのオンライン講演会

2 対象者

全校生徒 263 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

パラリンピアン講演を聞く中で、夢と希望の実現のため、何事も諦めずに努力を続けることの大切さを知る。

5 取組内容

- 事前に講師の方のプロフィールを紹介し、興味・関心を高める。
- Zoom を使って講演会を開催する。
- 事後の感想を書き、交流する。
- 学年通信や学校通信に掲載し、保護者や地域に実施した内容や生徒の感想などを広めた。
- 3 年生においては、体育の理論学習の授業において、講演内容をもとに深めていった。



6 成果

- 事前と事後のアンケート結果を比較してみると、9項目すべての項目において、肯定的な評価がプラスになった。特に「オリンピックに興味がありますか」は45.8%から66.7%、「社会や人のために役に立つことをしたいと思いますか」は、61.8%から85.4%という結果となった。
- 新型コロナウイルス感染症により、東京オリンピック・パラリンピックが延期になり、オリンピックへの関心が少し下降していた時に、この講演会をすることで、またオリンピック・パラリンピックに興味を持ち始めた生徒が増えた。
- 本校では、毎年この時期に駅伝・マラソン大会を行っているが、本年度開催できるかどうかの中で、いろいろな対策を行うことで、どうにか実施することができた。その取り組みの中で、生徒は自分たちが一生懸命走ることが、地域を元気にすることにつながることに気づき、スポーツの価値について、身をもって感じることもできた。

7 実践において工夫した点（特色）

今年度は、講師の方に直接本校に来ていただき、実際に車いすバスケットボールを実演していただきたかったが、新型コロナウイルス感染防止対策としてZoomを利用した講演会を開催した。当初は各教室で行う予定だったが、Zoomの受信がうまくいくか心配だったため、3つの教室（図書室・音楽室・理科室）を固定し行うことで、大きなトラブルもなく、進めることができた。

8 課題等

- 講演後に生徒からの質問コーナーを設けたが、同時にマイクをオンにしたため、ハウリングを起こしたり、聞こえにくかったりした。同時にするのではなく、クラスごとに順番にするほうがよかった。
- Zoomで講演会を開催することで、大阪からの網本選手の生の声での講演を聞いたり、車いすでのバスケットボールの様子をビデオで紹介していただいたりすることができた。しかしやはり実際に目の前で見たり、実際に体験をしたりすることで、もっと車いすバスケットボールの迫力やすごさや魅力が生徒に伝わるのではないかと感じた。そしてオリンピック・パラリンピアンと一緒に体を動かす中で、スポーツの魅力や楽しさを実感させたかった。また「おもてなしの心」を考え実行する場面が少なかった。

実践事例 10 山陽小野田市立有帆小学校（山口県）

1 実践のテーマ

地域人材を活用した運動教室

2 対象者

全校児童 137 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

東京 2020 大会（以下オリパラ）を契機としたオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）を推進し、運動・スポーツへの関心を高めることで、児童の運動習慣の定着・改善を図る。

5 取組内容

- (1) 著名なスポーツ選手を活用した運動教室（対象：第 5・6 学年 50 名）
西京銀行の女子実業団バドミントンチーム「ACT SAIKYO」の元選手を招聘し、運動教室を開催した。
- (2) スポーツの体験（対象：第 4 学年 32 名）
山口県車いすバスケットボール連盟の方を講師に、車いすバスケットボールを体験した。
- (3) レクリエーション協会と連携した運動遊び教室（対象：全校児童）
山口県レクリエーション協会の方を講師に、運動遊び教室を開催した。



6 成果

- 掲示を工夫し、オリパラに関する情報を提供することで、児童にとってオリパラが身近なものとなり、興味・関心を抱く児童が増えた。
- 県内のアスリートとの触れ合いを通じて、スポーツの楽しさを知ることができた。
- ボッチャや車いすバスケットボールの体験を通して、すべての人が一緒に競い合えるスポーツの楽しさに触れることができ、共生社会を構築していく上でのスポーツの役割や大切さに気付くことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

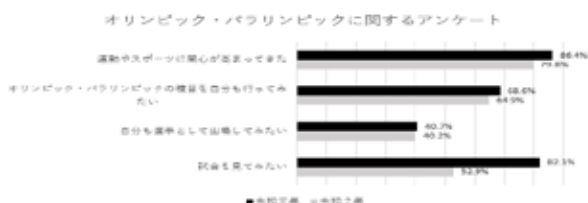
- 小規模校ながらスポーツ少年団活動が盛んで、保護者や地域住民が大変協力的である。そこで、著名なスポーツ選手を活用した運動教室では、児童にとって、より身近で憧れを抱き、自らの生き方につなげて考えることができるように、山口県で活動しているスポーツ選手を招聘した。
- 車いすバスケットボールでは、子供たちに車いすバスケットボールを実際に体験させる場を設定することで、競技の難しさや選手のすばらしさに触れ、パラリンピックに関する興味を高めるようにした。
- 一緒に活動することで、アスリートの動きを体感できる場を設定した。児童にとって思い出になるだけでなく、スポーツへの興味を高めることにつながると考えた。
- レクリエーション協会と連携した運動遊び教室では、山口県レクリエーション協会の方を講師に、運動遊び教室を開催した。昨年度、県レクリエーション協会の方を講師にすることで、教員の知らない新しい運動遊びの情報を得ることができたり、児童への声掛けや遊び方を学んだりすることができ、運動教室後も担任を中心として手軽に実施できるため、今年度も引き続き依頼をした。

8 課題等

今回の活動に対して、子供たちからは「楽しかった」という声が多く聞こえた。しかし、アンケートの結果から、オリパラに対する関心が去年よりも全体的に低くなっていることが分かった。体験したことをどう生かし、実践につなげていくか。そして、「する・みる・支える・知る」をバランスよく実施していくことについては、体育科を中心に様々な教科と関連付けながら実施していきたい。

また、運動習慣定着に向けて、今回の取組だけで終わるのではなく、子供たちが継続的に取り組めるような場を地域等と連携しながら設定していきたい。

さらに、スポーツをしている児童の人数の割に「オリンピックに出場してみたい」と考えている児童の人数が少ないため、オリンピック選手の講演等を通して子供たちのキャリア教育にもつなげていきたい。



実践事例 11 大洲市立大洲幼稚園（愛媛県）

1 実践のテーマ

オリパラを題材とした運動会の開催

2 対象者

全園児 33 名

3 展開の形式

【学校における活動】

行事名：幼少合同運動会

4 目標（ねらい）

- オリパラ大会に興味関心を持たせ、園児の世界観を広げていく。
- 運動会において、練習の成果を披露したり仲間と競い合ったりしながら、自分達のオリパラ大会を楽しむ。

5 取組内容

- オリパラ大会に関する絵本や紙芝居を見て興味を持つことができた。
- 自分達のオリパラ大会を行う上で、やりたいことを話し合った。（入場行進・開会式ダンス・リレー・メダル授与 など）
- 世界という社会に目を向けれるよう、国別対抗リレーを提案していった。
- 園児自身が国の選択ができるよう、事前に国の特徴や国旗について話をし、さらに、自分達で見たり調べたりできる絵本や図鑑などを準備した。
- 保育室に万国旗を飾り、国旗や世界について関心を持たせていった。
- チームで応援の国旗を作ったりハチマキや胸ワッペンをつけたりして、チームの団結力を高めていった。
- 自分達で、入場行進幕やオリパラ大会ロゴ、国ワッペン、金メダルなどの準備をすることで、当日に向けての期待感を高めていった。
- 当日は大勢の人に観覧してもらい、充実感を味わうことができた。
- 運動会当日は、自分達のオリパラ大会に出場するイメージを持ちながら大会を楽しむことができた。



6 成果

- オリパラ大会を知ること、世界観が広がり様々な国に興味を示し、絵本や国旗カードゲームなどの活動が盛り上がっている。
- オリパラ大会の活動や過程をとおして、体を動かすことが大好きになり、チームでの競争や縄跳び・フープなど、頑張る力が育ってきている。

7 実践において工夫した点（特色）

- 教師が事前にオリパラ大会に関することを調べ、伝えたいことをまとめ、園児に分かりやすくするため、絵本やDVDを利用して説明をした。また、グッズや音楽を選定し、園児自身がイメージを膨らませやりたくなるような事前指導を検討した。
- 幼小合同運動会の中に組み入れたことで、オリパラ教育を幅広く知らせることができた。

8 課題等

- 年齢差がある為、どの学年の園児たちが楽しめる内容にすることが大切である。
- 園児の自主性を重視して行事を進めていったが、運動会という行事の中、園児が出してくれたアイデアを取り入れにくい事もあった。

実践事例 12 高知県立高知国際中学校（高知県）

1 実践のテーマ

社会課題解決のためのスポーツづくり

2 対象者

第3学年 60名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

- スポーツの多様な楽しみ方を理解することができる。
- 社会課題を解決するスポーツを創るための多角的な視野を持ち、他者のために行動する意識や行動を起こす前向きな気持ちを高めることができる。

5 取組内容

「個人のものの見方とそれによる行動選択がコミュニティの関係性や状態に影響を及ぼす」ことを理解することを目標にした保健体育の単元の導入として、本事業を活用した。また、単元を通して目標を意識した学習を行った。

【導入】「ゆるスポーツ」ワークショップ

- 「ゆるスポーツ」の体験
- 「ゆるスポーツ」や「共生」についての講話
- 「ゆるスポーツ」をつくるワークショップ

「世界ゆるスポーツ協会」から講師をお招きし、上記内容を実施した。「社会課題解決のためのスポーツづくり」の手立てや考え方、多様性を認めることの重要性について学ぶとともに、スポーツの新たな楽しみ方についても知る機会となった。

【単元における学び】社会課題解決のためのスポーツづくり

本単元は、「スポーツでコミュニティの課題を解決しよう！」というゴールを設定しており、自分の所属するコミュニティにおける課題を見出し、その課題をスポーツにより解決することに取り組んでいる。他者の立場に立ってその課題を解決するために行動を起こすこと、自分の行動選択がコミュニティにどのような作用をもたらすのかを想像すること等を通して「関係性・ものの見方・選択」という概念について探究している。

授業の中では、個人のスポーツを創って実践することが難しいため、個人の考

えをグループで共有し、そこから見出した共通項を基にしたスポーツづくりを協働して行い、多様な考えを知ること、受け入れること、統合することについて学んでいる。計画し、実践し、振り返るという探究サイクルを繰り返す中で生まれた新たなアイデアを個人のスポーツづくりに還元し、ゴールを目指している。講師には、ワークショップ後も継続して助言をいただく等サポートをいただいた。



6 成果

- ルール作りの基本や「共生」についての考え方を学び、新しくスポーツを生み出すことの意義や社会課題を解決するとはどういうことかについて理解を深めた。また、ゆるスポーツを実際に体験することができ、スポーツの新たな楽しみ方に触れるという貴重な経験ができたことも成果の一つといえる。ワークショップにおいては、講師のファシリテートのもと、限られた時間の中で工夫されたゆかいなスポーツが生み出された。
- 本授業での学びを生かしたスポーツのルール作りを進められていることから、本事業の目的がおおむね達成されたといえる。さらに、講師には事業後にもサポートをいただき、継続してスポーツ創りの助言をいただくことや、オンラインで生徒に直接フィードバックをいただく等、繋がりが生まれたことも大きな成果であると感じている。

7 実践において工夫した点（特色）

生徒がスポーツを通して地域と社会とのつながりを意識できるよう、「高知家」のコンセプトを考えた方が立ち上げた「世界ゆるスポーツ協会」と保健体育の授業をコラボレーションした。

8 課題等

年度当初の単元計画に事業をうまく当てはめることができず、主に一つの単元内での実施に留まってしまった。事業の趣旨や「I'mPOSSIBLE」の教材の理解を深めたうえで、他教科も含めて年間計画を見直す必要があった。カリキュラム・マネジメントの視点が欠けていた。

実践事例 13 札幌市立中の島中学校（札幌市）

1 実践のテーマ

体育授業と体育的行事の連携によるオリ・パラ教育実践

2 対象者

全校生徒 380 名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：保健体育

その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- 延期になってしまったオリンピックやパラリンピックから多くのことを見て・感じて・考えることができるようにする。
- オリンピック・パラリンピック教育を通じて、自己の生き方を見つめたり、他者との関わりを振り返ることができるようにする。

5 取組内容

- ナカリンピック（体育的行事）の開催
- オリンピックの鈴木靖さんの講演
- 体育理論におけるオリンピック・パラリンピックについての授業とキャッチコピーの作成
- 保健体育授業での雪像による東京オリパラのキャラクター作成



6 成果

- 過去2年に引き続き講師をお招きして継続的にオリパラ教育が実践できたことにより、発展的に学習を進めた。
- 講演を中心として、事前事後に適切な活動を行うことにより、オリンピック・パラリンピックに向けた意識の高まりが見られた。コロナ渦の中で開催の可否が難しい状況であるが生徒自身が実際に会いたいという意欲は高まっていた。
- オリパラ教育は、単にそのスポーツやオリンピック、パラリンピックそのものを学ぶだけではなく、中学生期に重要とされる「目標達成への考え」や「夢に向かう姿勢」など様々な考えを学ぶことができる良い機会であった。

7 実践において工夫した点（特色）

- 今年度東京オリンピック・パラリンピックが延期になってしまったが、現状でできる範囲の中でオリンピック・パラリンピックを意識した活動を教科や行事などを横断的に取り入れていった。
- 事前学習を効果的に行い、知識を高めながら意欲的に取り組ませるよう工夫した。

8 課題等

東京オリンピック、パラリンピックの開催延期により、多くの意見があると思うが、その中でオリンピックやパラリンピックを開催する意義や素晴らしさについて伝えていく。

実践事例 14 横浜市立南吉田小学校（横浜市）

1 実践のテーマ

ゆるスポーツづくりを通したスポーツの多様性についての学習

2 対象者

第4学年 100名、第5学年 131名、第6学年 124名
全校児童 692名、各学年代表児童 24名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

行事名：運動会

その他：自分づくり（キャリア）教育、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- スポーツに関する興味・関心の向上
- オリンピック・パラリンピックの歴史、基礎知識等の獲得
- ゆるスポーツやパラリンピック種目の体験によるスポーツに関する見方・考え方の変容
- 多文化理解、多様性を尊重する態度の育成
- オリンピック・パラリンピアンとの交流を通して、自身の生き方についての探求、未来への夢や希望をもつことができる心の育成
- オリンピック・パラリンピックを通して、自分たちが住む「まち」とつながり、街の人や地域を大切にする心の育成

5 取組内容

- スポーツに関するニュースや各学年の活動記録の掲示

【具体的な掲示物】

- JSPO から配布されているスポーツニュース
- 各学年の、体育科での学習の足跡

- ゆるスポーツに関する取組

①ゆるスポーツ体験の事前学習

【具体的内容】

国際パラリンピック委員会公認教材「I'm possible」を活用し、誰もがスポーツを楽しむという点を知り、スポーツへの考え方を広げるための学習を行った。

②ゆるスポーツ協会の方々による活動

【具体的内容】

指導者：ゆるスポーツ協会

内容：ゆるスポーツ体験、ゆるスポーツの考案、
ゆるスポーツの考え方を生かした、運動会競技の作成

○南区役所地域振興課の方による、パラリンピック種目「ボッチャ」の体験

○多文化理解、多様性を尊重する態度の育成に関する取組

○運動会での多言語放送

○運動会での聖火リレー（外国につながる児童が、つながる国の衣装を着用し、開会式の聖火ランナーを務めた）



○オリンピック・パラリンピアンとの交流

①事前指導

【具体的内容】

○国語の「伝記を読み、自分のこれからの生き方について考える」の学習では、さまざまな人の人生経験や考え方をまとめ、自分の生きた方について考えた。スポーツ選手の伝記、自伝も副教材で多く扱い、オリンピック、パラリンピアンの方の生き方、考え方に共感する児童も多くいた。

○体育科の「マット運動」の学習では、自身の力にあった技を選択し、練習に取り組んだ。それぞれの技の質を高めたり、新しい技ができるようになるためのポイントや練習方法を知ったりするために、中瀬選手に実技指導を受けることの必要感をもった。

②北京五輪体操日本代表中瀬卓也選手による講演、実技指導

③高橋尚子さん、河合純一さんとのオンライントークセッション

【具体的内容】

○昨年度受賞した、「東京 2020 みんなのスポーツフェスティバル」の表彰式が中止となり、今年度あらたにトークセッションをオンラインで行った。今年度開催した、運動会について、児童代表からアスリートの方へ、自分たちの運動会の魅力や行い方などについて発表を行った。アスリートの方からは、自分たちが行った運動会を価値づけてもらったり、次年度以降の開催の仕方へのアドバイスをいただいたりした。

○地域交流

【具体的内容】

南区役所と協力を得て、ペットボトルキャップアートを作成、ライトアッ

イベントを行った。壁画の材料となるペットボトルキャップを集めるために、校内や地域の人へ呼びかけた。5年生の実行委員が中心となり、企画・作成に取り組んだ。ライトアップ期間は、大通りを通る多くの人が見てくださり、地域とのさらなるつながりを得た。①オリンピック・パラリンピックを盛り上げたい②世界中の人が一同に集まり、スポーツを介して互いに楽しむ日が一日でも早くくることを願いたいという想いを表現した。

6 成果

- 次年度行われるオリンピック、パラリンピックへの感心が高まった。オリンピック、パラリンピックを楽しむ上での知識が増えた。
- ゆるスポーツを経験したり、運動会競技を自分たちで考えたりするという学習活動を通して、「スポーツ」というものへの考え方が広がった。また、「スポーツ」という題材を通して、多様性を認めたり、多文化理解をしたりする心の育成ができた。

7 実践において工夫した点（特色）

半数以上の児童が、外国につながるという本校の特徴を生かして、多文化理解や多様性を認めたりする活動ができた。オリンピック・パラリンピックの価値が本校の学校運営理念である「多文化共生」と重なる部分も多く、「スポーツ」「オリンピック」「パラリンピック」という題材を活用しやすかった。

8 課題等

- ゆるスポーツ体験を行い、学んだことを活かして運動会競技を考えていくという実践は、つながりがあり児童も意欲的に活動をすることができた。今回は、高学年を中心に本実践を展開していった。児童が主体となり、全校へ展開していければ、より主体的な学習にすることができたと振り返る。
- 今年度は、感染症予防のため、児童の学習するフィールドに制限があった。より多くの人やモノと出会わせて学習を展開していくことで、質の高い学習ができたと感じる。具体的には、子どもたちにとって身近な「横浜スタジアム」やオリンピック・パラリンピック開催にむけての「横浜」という町の取り組みなどに焦点をあてて、学習を展開することもできると考える。

MEMO

実践事例 1 筑波大学附属聴覚特別支援学校

1 実践のテーマ

「車いす」を通して学ぶ共生社会

2 対象者

高等部専攻科生 第1・2学年 23名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：社会生活

行事名：「車いすバスケットボール選手による講演・体験会」

その他：「空飛ぶ車いす」支援事業

4 目標（ねらい）

- 「車いす」の学習を通して多様性に気づき、共生社会に向けた態度を育てる。
- 車いすバスケットボールを通して、他の障がい及び障がい者スポーツへの理解を深める。
- パラリンピックへの興味・関心を高め、障がい者スポーツ選手の競技力を知る。

5 取組内容

【共通科目「社会生活」における取組】

専攻科の共通科目「社会生活」の中に「社会福祉と行政の支援」という単元があり、ボランティア活動について扱っている。授業では実際に通常の車いすに乗り、スロープや段差、エレベーターの乗り降り等の体験を行った。また、生徒一人一人が自走する場面と、介助し合う場面の両方を体験した。



【「空飛ぶ車いす」支援事業】

大学の学生や高校生が集い行う「空飛ぶ車いす」支援事業（高価な車いすを購入することができないアジアの子供たちに中古の車いすを整備してプレゼントをする活動）に本校専攻科も2012年から参加している。新型コロナウイルス感染症の影響で昨年度と今年度は実施できなかったが、2017、2018年は本



校を会場に車いす整備を行った。2018年には実際に整備した車いす7台を本校専攻科の台湾研修旅行に持参し、台湾の基隆市輔具資源中心へ寄贈した。なお整備内容は、車いすの車輪部のベアリング調整、清掃、グリス注入などの軸調整を中心に根気のいる作業を大学生や他校高校生、本校専攻科生が混合グループを組み、iPadの筆談アプリを使うなど、お互いのコミュニケーション方法を工夫しながら取り組んだ。

【車いすバスケットボール選手による講演・体験会】

講演会では車いすバスケットボールの橘貴啓選手の経験談や、ルールについてクイズ形式で分かりやすい説明があった。体験会では、車いすバスケットボール用の操作の仕方を一通り学んだ後、小学生用のバスケットボールを利用しシュート練習を行った。最初は車いすやボールの扱いに戸惑いながらも、しだいに慣れてくると車いすを自由に操り、走らせてシュートを打つことができるようになった。その後約1時間を使い、実際にゲームを行った。5対5のゲームの中で橘選手には適宜アドバイスをいただいた。最後のゲームは橘選手対生徒10人で行った。橘選手のオフェンスを誰も止めることができなかった。



6 成果

- 「車いす」の学習を通して、車いすを使用する人の安心感、恐怖感を実際に感じることができた。この経験を基に介助の工夫や理解を深めることができた。
- 車いすの整備を健聴者と協力して行う中で、互いを認め合い、助け合うことができた。またコミュニケーション方法を工夫するなど共生社会の形成に向けた意識を高めることができた。更には、車いすを必要とする方を想像しながら整備することで、他者理解を深めることができた。
- 車いすバスケットボール選手の車いすの移動の速さや力強く正確なシュート等を目の当たりにし、一人のアスリートとして認識し、障がい者スポーツに対する興味・関心を高める機会となった。
- 下記の感想にもあるように、車いすバスケットボールの試合の観戦や個人として競技に参加したいなど障がいの有無に関わらず、誰もが楽しめるスポーツとして認識することができたことは、大きな収穫である。

(講演・体験会後の生徒の感想)

「予想以上のスピードでびっくりした。」

「今回、橘選手対生徒10人で試合をしたが、橘選手1人だけバイクに乗ってい

るように速く、カーブもストップも綺麗だった。追いつくこともできず悔しかったがすごく楽しかった。」

「障がいがある人も健常者も分け隔てなく楽しめる素敵なスポーツなのでこれからもっといろいろな人に親しまれて行って欲しい。」

「車いすバスケットボール用の車いすはハンドリムが細く、握りやすく操作しやすかった。橘選手はとても筋肉質でこれがアスリートなのかと思った。シュートの軌道も美しく驚きを通り越し感心した。機会があれば車いすバスケットボールの試合を観戦したい。自分でもプレーしてみたい。」

7 実践において工夫した点（特色）

- 他者理解を深めるために、通常の車いすと車いすバスケットボール用の車いすの両方を体験できるように計画した。
- 車いすバスケットボールの講演・体験会では、より長い時間車いすの体験ができるよう専攻科 23 名に的を絞った。また、車いすを 1 週間借用し、他学部の生徒も体育の授業の中で、車いすバスケットボールを体験することができた。

8 課題等

車いすや車いすバスケットボールに対し、かなり高い意識で取り組むことができたが、今後の生活の中でどのように障がい者スポーツ（他の障がいも含めて）と関わっていくのかを考える必要がある。

MEMO

実践事例 2 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

1 実践のテーマ

コロナ禍における“する”スポーツの実践事例 ～オンラインでのボッチャ～

2 対象者

中学部 第1学年～高等部 第3学年 23名

3 展開の形式

教科名：体育（高等部 第2～3学年）

その他：部活動（中学部 第1～3学年、高等部第1～3学年）

4 目標（ねらい）

コロナ禍での肢体不自由児の体育の学びの実態

- 基礎疾患を有する児童生徒が大半を占め、感染予防のため登校を自粛することなどにより、対面での授業を受けることが難しい。また、対面での指導においても、感染予防に配慮した学習内容により、対人的な種目を通じて学ぶことが難しい。
- 上記のような、身体的、環境的な難しさのある肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒の生徒に対して、「考える、聞き合う・伝え合う」に重点を置いたオンラインでのボッチャの指導を実施した。指導では、対面での指導と継続して、ボッチャの種目特性に加え、仲間とともにプレイを進める協同的、対話的な学習をねらいとした。

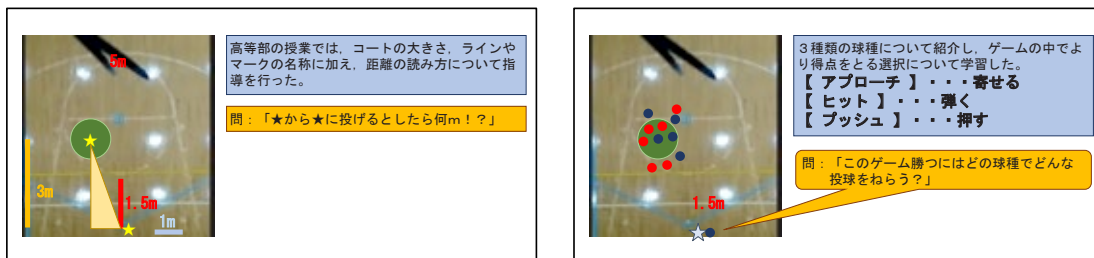
5 取組内容

本実践では、ボッチャのクラス分けBC3に該当する選手のプレイを参考に内容を考えた。各家庭と学校をTV会議システム（Zoom）でつなぎ、話し合いをしながらゲームを進める、ボッチャのゲームにおけるペア戦、チーム戦の要領でゲームを行った。プレイの実際は、仲間と相談して決めた作戦を実行するために、ランプの方向やボールの距離等をオンラインでアシスタントに指示を出し、ゲームを進めた。単元の始めは、話し合いの進め方を参考にするため、ブレイクアウトルームは活用せず、相手チームの作戦を聞きながら段階的に学



習活動を展開した。

1 球ごとに戦況が変わる中で、作戦を考え、プレイを選択していくために必要な技能として、「目標までの距離の測り方」、「球種を選択」について学習を行った。



6 成果

【成果】

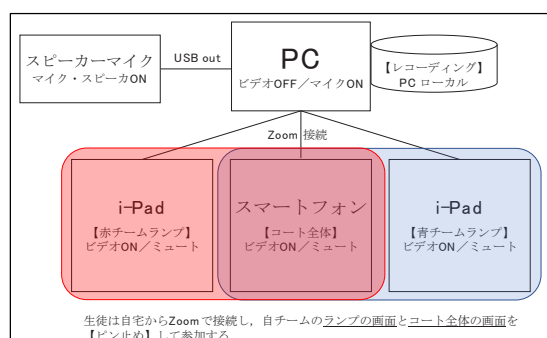
- 登校することが難しい生徒に対して、「思考・判断・表現」に重点を置いた学習を展開することができた。
- 他校との交流、遠隔合同授業等での学習の機会の可能性を感じるものとなった。

【生徒の感想】

- オンラインだと先生にボールを投げさせていただくので自分で投げるということを経験はできないけれど、先生や人にもものを正確に分かりやすく伝えるという練習にはなれたと思う。
- なかなかコミュニケーションを取ることはできず、投げるだけといったことをしたので、みんなで体育館などの場所でポッチャをして交流を深めたいと思った。

7 実践において工夫した点（特色）

機器接続構成



参考資料

8 課題等

- ポッチャの指導事項の検討が必要
- 通信環境、情報機器の整備が必要
- ボール、ランプ等の道具の調整
- 対面指導と遠隔指導の学びの連続性の検討

実践事例協力校一覧

【幼稚園】

大洲市立大洲幼稚園（愛媛県）

【小学校】

滝川市立江部乙小学校（北海道）

猪苗代町立翁島小学校（福島県）

鹿嶋市立鹿島小学校（茨城県）

浦安市立見明川小学校（千葉県）

中能登町立鹿島小学校（石川県）

長野市立鍋屋田小学校（長野県）

羽島市立竹鼻小学校（岐阜県）

鈴鹿市立一ノ宮小学校（三重県）

岩美町立岩美西小学校（鳥取県）

津山市立北小学校（岡山県）

和気町立佐伯中学校（岡山県）

山陽小野田市立有帆小学校（山口県）

高松市立屋島東小学校（香川県）

熊本市立託麻東小学校（熊本県）

いちき串木野市立市来小学校（鹿児島県）

千葉市立若松小学校（千葉県）

横浜市立南吉田小学校（横浜市）

静岡市立中藁科小学校（静岡市）

浜松市立都田南小学校（浜松市）

【中学校】

岩泉町立小川中学校（岩手県）

七ヶ浜町立向洋中学校（宮城県）

柏市立田中中学校（千葉県）

昭和学院秀英中学校（千葉県）

沼津市立第二中学校（静岡県）

春日井市立知多中学校（愛知県）

益田市立美都中学校（島根県）

高知県立高知国際中学校（高知県）

飯塚市立二瀬中学校（福岡県）

札幌市立中の島中学校（札幌市）

京都市立七条中学校（京都市）

岡山市立上南中学校（岡山市）

福山市立加茂中学校（広島県）

北九州市立城南中学校（北九州市）

【高等学校】

茨城県立常陸大宮高等学校（茨城県）

栃木県立小山城南高等学校（栃木県）

群馬県立安中総合学園高等学校（群馬県）

埼玉県立羽生第一高等学校（埼玉県）

京都府立東稜高等学校（京都府）

岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）

【中高一貫教育校】

秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学・
高等学校（千葉県）

【特別支援学校】

千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）

千葉県立東金特別支援学校（千葉県）

滋賀県立愛知高等養護学校（滋賀県）

【筑波大学附属学校群】

筑波大学附属聴覚特別支援学校

筑波大学附属桐が丘特別支援学校

令和2年度スポーツ庁委託事業 オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業 実践事例集

令和3年7月発行

編集・発行

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）

茨城県つくば市天王台 1-1-1 GSI 棟 204

日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（N-COPE）

東京都世田谷区深沢 7-1-1

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター（ROPE）

埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学所沢キャンパス 100-427

印刷会社名 前田印刷株式会社

令和2年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ ムーブメント全国展開事業

実践事例集